第１５回（２０２３年度）

明治大学文学賞
受賞作品集

倉橋由美子文芸賞
阿久悠作詞賞

MEIJI
UNIVERSITY

第15回　明治大学文学賞

第十五回　明治大学文学賞　受賞作品

第一部門　倉橋由美子文芸賞

大賞　「カレーパン」　菊地　旭輝　（文学部３年）

佳作　「透明人間、簡単に消えた」　桑島　直寛　（文学部３年）

「白昼夢」　宇多津　香穂　（文学部３年）

第二部門　阿久悠作詞賞

大賞　「たからばこ」　【A】自由作詞形式　和田　悠香　（情報コミュニケーション学部２年）

佳作　「ため息はＣＯ２」　【B】課題タイトル作詞形式　瀧口　遼真　（文学部２年）

「ニィハォストリート」【A】自由作詞形式　佐川　雄琉　（農学部２年）

「ラジオの海を泳ぐ」　【A】自由作詞形式　後藤　千萌　（文学部２年）

【目次】

第一部門　倉橋由美子文芸賞

倉橋由美子文芸賞　選評 …… 1

「カレーパン」　菊地　旭輝（文学部３年）…… 6

「透明人間、簡単に消えた」　桑島　直寛（文学部３年）…… 31

「白昼夢」　宇多津　香穂（文学部３年）…… 57

第二部門　阿久悠作詞賞

阿久悠作詞賞　選評 …… 82

「たからばこ」　【A】自由作詞形式　和田　悠香（情報コミュニケーション学部２年）…… 85

「ため息はＣＯ２」　【B】課題タイトル作詞形式　瀧口　遼真（文学部２年）…… 88

「ニィハォストリート」　【A】自由作詞形式　佐川　雄琉（農学部２年）…… 93

「ラジオの海を泳ぐ」　【A】自由作詞形式　後藤　千萌（文学部２年）…… 97

倉橋由美子文芸賞　選評

井上 善幸

残念ながら今回はぜひともこれを、という作品に出会うことはできませんでした。そこで以下、選考作業のなかでメモしたことを記すことで選評にかえたいと思います。比較的評価の高かった作品の冒頭部分を紹介しつつ記していきます。

「車内は暗く、真夏であることを忘れるほどに寒かった。炎天下を歩くうちにかいた汗のせいかもしれない」。この「白昼夢」については、前半はあまりよいとは思えませんでしたが、後半以降に見るべきものを感じました。何か伝えたいものをもっている人だと思います。もう少し表現力が欲しいとも感じました。

「透明人間、簡単に消えた」は太宰治の『パンドラの匣』からの一節をエプグラフに据え、「夏休み明けの最初の授業、ゼミの女の子〔ママ〕が男と手を繋いで談笑しているのを目撃した帰り道、ぼくは自分の指先が透けていることに気が付いた」とあります。この設定が読者の関心を惹きつけ、比較的よく書けているという印象ですが、途中少し不満が残りました。興味深く拝見したことは事実です。

見事大賞を受賞した「カレーパン」は「渡辺小枝子（わたなべさえこ）は、埼玉県にあるパンの製造工場でパートタイマーとして働いている」から始まります。小説らしきものが書けてしまうその才はもちろん認めるのですが、個人的にはパンと言えども食料であることを思うと、それが「製造工場」で作られる設定に抵抗をおぼえました。日本の食料事情を憂えているぼくのようなものにとり、それを前提として物語が紡ぎ出されてゆくことに違和感を禁じえなかった次第です。

「一本、たった一本路地を曲がるだけで、そこは魔境だ」から始まる「Deliverer」については、今回一等興味を覚えつつ読みました。キリスト教的な愛が問題となっている印象で、十九世紀の英国小説――例えばディケンズのような――を思い浮かべました。普段の生活の延長を描いたような応募作が多い中にあって、異質な

想像力を発揮して書かれた作品であるところに好感をもちました。それにしてもなぜタイトルにハイフンがつくのか、理由は明かされないままです。

全体として、これは、とこちらを唸らせてくれる作品に今回は出会えなかった、という読後感です。

生そのものが思考の実験場であってよい、とまでは望みませんが、せめて小説空間においては、思想や文体にもっと冒険があってよいのでないか。これまでのモダニズム以降の世界文学の展開はなんだったのか、どうしてもっと執筆過程に étrangeté が入り込んでこないのか、疑問が残りました。

福間 具子

今回の投稿数は一七本とのことで、私が審査員を務めたこの三年間の中で一番少なかった。選考を行った結論から言うと、全体的に小粒で、傑出した作品があまりないように感じた。よくも悪くも、コロナ禍は若者の感性に非日常という刺激を与えていたのかもしれないが、日常が戻った二〇二三年は、視線をやや内向きにし、尖った感受性を鈍麻させてしまったのかもしれない。

その中でも『カレーパン』は輝いていた。製パン工場で働く二七歳の女性と、年下のアルバイト男性の人生が束の間交わる物語である。大量生産される油っこいカレーパンに、自分を重ねる女性。カレーパンが脇役としていい仕事をしていた。小枝子を蓮佛美沙子、オセロを小関裕太…と脳内で勝手にキャスティングして一本の映画のように味わっていた。下の名前で呼ばれている理由を問われて、「この工場には渡辺さんが一三人います」と答えるなど、没個性をさらりと表現するセリフ回しが巧みだ。じわりと沁みる丁寧な描写は、『すいか』『野ブタ。をプロデュース』などのドラマ脚本を手掛けた木皿泉を思い出させた。ただし後半は少し無理に引き延ばしたように思えなくもなかった。

それ以外は多くの作品が横並びで、審査員を大いに困らせた。最終的に佳作となった『透明人間、簡単に消えた』は等身大の大学生の姿であり、空回りする自意識と希薄な自己像がひりひりと痛い。共感する若者は多いに違いない。私が推したのは『白昼夢』であった。大きな事件が起きず、淡々としているが次第に抒情が深まってゆくタイプの物語が好みなので、失踪した兄と弟の間の（直接には何も起きていない）響きあいが美しいと思った。ただし好みが分かれる作品ではあるだろう。

この賞は今年で幕を下ろすらしく、一抹の淋しさを覚える。ただ、これまで芸術作品は権威ある賞を得ないと世に出ることが叶わなかったものだが、近年では音楽でも小説でも、ネット上でまず人気を得ることも多い。形骸化した権威にすがるよりも、むしろ風通しが良い。才能は必ず誰か

の目に留まるものである。表現したいという気持ちを持つ人はこれからも何かを外に向けて伝え続けて欲しい。

谷本 道昭

昨年度の選評では、「物語」をいかに物語らしくなく成立させることができているか、を優れた作品の条件としてあげたのですが、今年度は少し素直になって、「物語」はいかにして「作品」となるのだろうか、ということから書いてみようと思います。

書かれた時点ではいわば無名の状態にある「物語」は、読者に受け入れられ、評価されることを通じて、初めて「作品」として公に認められ、やがて有名作となっていくこともあるでしょう。しかし、当たり前のことですが、読者に読まれることがなければ、「物語」は無名のままにとどまるか、運が悪いと作者自身によってその存在自体が否定されることにもなりかねません。では、「物語」を待ち受けるこうした不運を回避するにはどうしたらよいのでしょうか。

私としては、その最良の方法は、創作中の作者が同時に自作の最初の読者となり、自作を批判的に読み込みつつ作者を叱咤激励し、作者と協働して執筆を進めていくことだと考えています。そして、書く行為と読む行為が作者＝読者によって際限なく繰り返され、ようやくその繰り返しも終わりを迎える頃に、「物語」は自然と「作品」としての生を歩み始めるのではないかと思うのです。そうなると、私たち一般読者のいう優れた作品とは、作者の中であらかじめ「作品」の域にまで高められた「物語＝作品」なのだといえるかもしれません。

大賞に選ばれた『カレーパン』はそのような優れた作品としてすでに独り立ちしているばかりか、文学の海を自由に泳いでいる、と言えるほどの達者さを感じさせる点で他に抜きん出ていました。佳作となった『透明人間、簡単に消えた』は等身大のストーリーの中で若々しい想像力と創造性がきらめいていましたし、同じく佳作の『白昼夢』は登場人物から放たれた未成熟性という鈍く光るオーラが読者にまで届くかのようでした。ちなみに、私の中での次点は『無限会社家族』でありました。

最後となりますが、応募されたみなさんに応援と連帯のメッセージを。

これからもよく書いてよく読む文学生活を続けていきましょう！

「カレーパン」

菊地　旭輝

■受賞のコメント■

この度は、小稿『カレーパン』を大賞に選出していただき光栄に思います。わたくしは、第十三回「明治大学文学賞」「倉橋由美子文芸賞」でも『眼光』という作品で佳作を受賞しておりまして、二度目の受賞でございます。賞に携わっていらっしゃる皆さま並びに、このような機会をもうけてくださった皆さま方に、心から感謝申し上げます。「明治大学文学賞」は、わたくしの大学生活において大変貴重な経験となりました。

今回の作品は、あえて構想を決めずに思いつくまま書くというスタンスで臨みました。そのため何に着想を得たのか、どうしてカレーパンなのか……どうもハッキリと思い出せません。ずいぶん変テコな話になったなと思います。ただテーマとしましては一貫して「コミュニケーション」の問題を扱っていると考えております。当時は、村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』を読んでいたのでした。作中に口真似をするシーンがありまして、気に入ったのでこちらにも活用させております。

おわりに、どうでもいいことのようですが、コンビニのホットスナックコーナーにあるカレーパンは安くてサクサクでおいしいので、皆さんにもお伝えしておきます。

カレーパン

渡辺小枝子（わたなべさえこ）は、埼玉県にあるパンの製造工場でパートタイマーとして働いている。その工場は各駅停車が止まる小さな駅からバスで十八分の所に位置しており、工業団地の真ん中にどっしりと四角四面な箱状の建物を構えていた。建物はどこをとっても機能的で、遊び心みたいなものは無かった。だがそこに威圧的だという雰囲気は無い。ある種の完成された機能美――それはむしろ万人にとって快く、清潔でスマートなのだった。

敷地は東京ドーム二個分。けれどその広さにもちゃんと意味がある。建物を置いて、道路を敷いて、必要に応じた緑を植える。こうして工場設計者が弾き出したのが、今の敷地の広さだ。ここでは毎日嘘みたいにたくさんのトラックがやって来ては、やがて適当な時間が過ぎると別の荷物を積み込んで出て行く。もちろんトラックの動線やタイムテーブルも決まっているはずだ。邪魔な贅肉みたいなものがそぎ落とされて設計されている。ストイックだ。とても。

小枝子が聞いたところ、従業員数は約三百人だった。工場へ向かうバスには一台でぎゅうぎゅうに人が乗る。でも誰も話をしない。みんなお通夜に行くみたいに黙っている。着替えの時間だけは例外で、知り合いと挨拶をする。集まって社員の悪口を言う。製造レーンに行くと、機械がうるさくて話せない。黙っている。休憩時間はバラバラだから食堂で一人きりで食べる。喋らない。帰りのバスもみんなお通夜。ストイック。

小枝子が担当するのは菓子パンの製造ラインだった。中でもカレーパンを主に任されている。ほとんど毎日カレーパンしか見ていない。中途半端なカレーパン。小枝子の元に運ばれて来るときには既に生地とカレーで、小枝子が見送る頃はまだ包装されていない。だから小枝子は生地やカレーの製造方法を知らないし、包装されて配送される場面も見たことが無い。小枝子が見るのは生々しい製造過程だけだ。これもなかなか職人的でストイック。

五月第三週、小枝子はいらいらした気分で出勤していた。小枝子と一緒の製造ラインを担当しているパートのおばさんが「お腹が痛い」と言って休んだのだった。小枝子は馬鹿みたい、と思った。そんな言い訳が世間に通用するわけないじゃないと心の中で思った。しかし誰だって出勤は強要できないし、諦めるしかない。小枝子は代役の不出来な社員と働かなくてはならないはずだった。だけど、菓子パン部門のチーフが連れて来たのはおばさんでも、出来

損ないの社員でもなかった。背の高い男の人だった。
「小枝子さん。この子、今日からバイトでこのラインに入ります。大学生。面倒見てやってください。今日の朝番です」
「おはようございます。カトリソウタです。よろしくお願いします」
白い衛生服にマスクをしていたので表情は窺えなかった。彼はのそりとお辞儀をした。首をもたげただけだ。小枝子は胃がきりきり痛むのを感じた。だが帰るわけにもいかない。小枝子が休んだらカレーパンが北関東のスーパーに並ばなくなってしまう。チーフは彼を預けると、せっせと別のラインに行ってしまった。
「私は渡辺小枝子です。ここではカレーパンを作っています。作業自体は難しくありません。ただ、体力と忍耐力が要る仕事です。それと工場内は気温が高くなります。水分補給はこまめにして、気分が悪くなったら私に口頭で伝えてください」
「了解です。それで、ここは何をするのでしょう？」
小枝子は一通りの作業を彼に教えた。別の場所から運ばれる生地を釜みたいな機械に投入し、スイッチを押す。カレーが減ってきたら冷凍庫から補充する。あとはベルトコンベアー式の機械が勝手に生地を丸めてカレーを仕込み、六列に並べて流してくれる。流れてきたカレーパンは三人で必ず目視点検をする。ここで変な形状だったり列から外れていたりすると手作業で除かないといけないのだ。それから油で揚がった後も三人が目視でチェックを入れる。それが終わればベルトコンベアーで、勝手に次の工程に流れていく。
難しい作業じゃない。一日あれば習得できる。小枝子の説明が終わると彼はふうんなるほどと頷いて作業に取り掛かった。そして小枝子の予想とは裏腹に問題なく仕事をこなした。時折小枝子に必要な質問をした。質問というより確認だった。この人は頭がいいんだと思った。
はじめ彼は視線を四辺に動かして好奇心旺盛に工場を観察していた。しかし三時間も経つと飽きたみたいで、つまらなそうに仕事をこなしていた。無理もない。小枝子たちは時間が右から左に流れていくのを見続ける作業なのだ。小枝子から声を掛けた。
「お昼休憩にしましょうか。疲れたでしょう」
苦笑いで「はい」と返された。小枝子は真っ白な作業着を脱いで、中に着ていた地味なポロシャツとズボンのまま食堂に向かった。そこに彼も来た。同じ親子丼を頼んでいた。目が合うとお辞儀された。小枝子もお辞儀した。服が白黒だったので小枝子は

彼を「オセロ」と名づけた。パンダと迷った。でも彼は太っていなかった。

「小枝子さんはどうして『小枝子さん』って呼ばれているんですか？」

午後の仕事でオセロが話し掛けてきた。カレーパンの向きを直したり、取り除いてゴミ袋に投げるのに退屈しているようだった。作業中に会話することは今まで無かったから小枝子は驚いたけれど、話を打ち切るようなことはしなかった。どうせカレーパンは永遠に一定の速度で流れてくるのだ。仕事に支障があるわけではない。

「この工場には渡辺さんが十三人います。下の名前で呼んで区別しています」

それから十分間沈黙が続いた。「ブロローン」というベルトコンベアーや油の音の混声音が二人の間に響いた。気まずい沈黙ではなかった。本来、こういう行為なのだ。小枝子は十円玉みたいに潰れたカレーパンを持ち上げて捨てた。

「私、君のこと『オセロ』と呼びます」

「え、オセロ、どうして？」

「服がパンダみたいだった」とマスクの下で笑う。

オセロは天井を見上げた。そこには「3」という製造ライン名の看板と、ベルトコンベアーと平行に並んだ直管蛍光灯が備え付けられている。真下では二人の黒々とした影法師が真っ直ぐ映し出されていた。彼は自分の服を思い出してかすかに笑った。

また無言の時間が続いた。生地を投げ込んだ。カレーを追加した。不良品を捨てた。場所を交代して、焼き上がりのカレーパンの列を監視した。小枝子はこちらのレーンの方が好きだ。香ばしいカレーの匂いがする。ただ、手袋で触ると熱い。

「どうして小枝子さん、この仕事してるんですか？」

ふとそんな風に訊かれた。機械がうるさいのによく声が通る。音の周波数が違うのだ。オセロは小枝子をちらっと見ると、焦げたパンを摘まんでゴミ袋に投げた。ピッチャーの牽制球みたいに。

「確かに退屈な仕事かもしれないけど、私の性に合っているの。寡黙に作業するのが好きなんです」

「そうですか。俺は毎日この仕事をしていたら参っちゃうな」

そうだろうと思った。オセロは頭がいいのだ。

「じゃあ君は辞めるんですか？」

「もうしばらく辞めないですよ。このバイトは繋ぎなんです。実は前のバイト辞めたんです。夏に留学に行くのでキリがいいところで身を引きました。このバイトは留学までの繋ぎ。いつでも辞められるじゃないですか。短時間でもオーケーだし。でも時給が高い」

要するに都合がいいんです、と言った。オセロにとって工場は都合がいい。私と同じだ。

「小枝子さんも若いし、綺麗なんだから他で働くところあると思いますよ。お洒落なバーで澄ました顔で酒をすっと差し出してグラス磨いていれば、もっと稼げると思うけどな」

小枝子は人生で初めて「若くて綺麗」だと言われた。容姿を褒めた男は、高校時代の恋人だけだ。彼はいつも小枝子のことを可愛い可愛いと言っていた。馬鹿みたい。

「向いてないのよ。それに稼ぎは充分ある。今よりお金があっても仕方ないの」

オセロは再びふうんと頷いた。彼は頭がいいのだ。だから自分の想定外の考えをする人がいても、ふうんなるほどと言って吸収してしまう。小枝子の昔の彼氏もこういう人だった。手応えが無いようにみえて、きちんとわかっている。

「君は、どういう仕事がしたいのよ？」

小枝子もオセロを真似して穴の開いたカレーパンを捨てた。右腕を振りかぶって箱の中にパンを叩きつける。なんだか悪いことをしているみたいで愉快だった。バンクシーが白黒で描いた、花束を投げる男になった気分だった。どうしてこんな楽しいことに気が付かなかったのだろう。ビニール袋に不格好なパンが積み重なっていく。

「俺は卒業したら、貿易の物流会社で働きたいんです。海外の業者と交渉して、商品とか船とか手配して在庫調整する。すごく巨大で複雑なシステムですけど、俺の裁量で損益が決まることもあります。だからこそやりがいがあると思います」

「外国で仕事したいの？」

「外国にも行きます。俺、こう見えてスペイン語できるんです。オラ、コムスタァス？」

小枝子は首を傾げた。オセロはお茶目に笑った。まだ子供なのだと思った。自分が学生だった頃が突然懐かしくなった。そしてどうして私はカレーパンを作っているのだろうと思い始めた。他の仕事に就いていたら、という仮定を今までちっとも考えてこなかったのだ。

「ここにいると、俺も落ち着きますけどね」

オセロは一時間早く上がった。その後小枝子はバスで駅まで帰り、そこから電車で二駅移動した。帰宅する前にスーパーに立ち寄った。ガラス張りの明るい店だった。日中は鼻息の荒いおばさんたちがうろうろしているけれど、夕方から夜にかけて店内は静かでがらりとしている。小枝子は息を潜めるようにカゴに食材を入れていく。料理は実は好きじ

やない。でも、女友達が毎日一回はしろと言う。後で自分が困ると言う。何が困るのかピンと来なかったが、その友達はいつの間にか子供を作って結婚した。このことだなと思った。三十歳に近付けば、いまに周りが結婚するよと脅される。小枝子にはそういう相手はいない。欲しくもない。でも他に何かやりたいことがあるわけでもない。毎日工場と家を行き来するだけ。でも、小枝子は不満じゃない。そんなんだから結婚できないのと言われる。でも小枝子にはそういう話にリアリティを感じない。誰かと一緒に暮らす生活が、ちょっと想像できない。

小枝子は値引きコーナーで立ち止まった。無骨なカゴ車の上にカレーパンが雑然と置かれている。小枝子の勤める工場で作っているカレーパンだ。消費期限が明日までのため三割引で売られているらしい。黄色い値引きのシールが「ふんわりカレーパン」の「レー」の所に被せて貼ってある。七つも売れ残っているのねと小枝子は悲しくなった。これまでも値引きされた自社のパンは何度も見かけたものだ。小枝子の製パン会社は全国に工場を持ち、同じパンを流通させている。スーパーでもコンビニでも見かける。だからこれは全然珍しいことじゃないのだ。でも、カレーパンがこんなに集まって余っているのは初めて見た。どうして皆カレーパンを食べないのかしら。小枝子は手に取ってじっくり眺めて見た。

やがて小枝子は思った。どうしてこんなカレーパンを食べなくちゃいけないのかしら。小さいぶん安いけれど、味は特別美味しいわけでもない。おやつにはこってりし過ぎる。昼食には物足りない。誰がいつこんな脂っぽい陳腐なパンを食べないといけないのだろう。そう思うと、買ってくれる主婦を石ころみたいに待つカレーパンが不憫に見えてきた。誰が食べるのよ、こんなもん。小枝子は昼間みたいに投げつけてやろうかと思った。だけどやめた。自分みたいでやっぱり可哀想な気もする。愛着もある。だから二つ買ってあげた。私が食べてしまうのだ。この恥さらし。小枝子は一人のアパートに帰り、散らかる部屋でカレーパンをお行儀悪く食べた。悪い気はしない。

オセロは案外まじめな青年だった。バイトには休まずに来たし、仕事も実直にこなした。ただ彼の頭の良さをこの工場では持て余していた。でもまあどうせすぐ辞めるのだ。逆ならまだしも、退屈ならば我慢するだろう。

その日機械の不調が起きた。カレーが詰まったのだ。だからレーン上にあったパン一帯が被害を受けた。まるきりカレーが注入されていないようだった。

機械の故障自体はものの五分で直った。しかしカレーパン六十八個が処分ということになった。小枝子は管理責任者として六十八個処分と紙に記入した。オセロが処分予定のパンを眺めていた。青い半透明のビニール袋の中には六十八個のパンが詰められている。

「ねえ、小枝子さん。このパンは捨てちゃうんですか？　豚のエサになるの？」

「捨てちゃうよ。まとめてビニール袋に詰めてゴミ箱行き」

　オセロは首を傾げていた。彼にしては珍しく納得がいかないみたいだ。

「でもさ、半分くらいのものは揚げてあるわけじゃないですか？　カレーが入ってなくても揚げパンならまだ食えるでしょ。前から思ってたんですけど、ちょっと焦げたり形が悪いからって何も捨てることはないじゃないですか。そこまでの罪は無いと思うんです」

　罪……と小枝子は考えてみた。確かにカレーパンに罪は無い。たまたまその場にいただけで、彼らが処分になったことは彼ら自身の落ち度ではない。宿命でもない。ただそれはそれとしてそういうものなのだ。

「でも駄目なのよ。衛生的に保証ができないものを提供することはできない」

「店で売らなくても、俺たちが食べるってわけにはいかないんですかね」

　ちょうど点検が終わって機械が回り始めた。五分くらいで再起動して、ここにもパンが流れてくるだろう。小枝子とオセロはレーンの傍に立った。オセロは何も運ばれていないレーンを手袋の指でなぞっている。長くてスマートな指だ。

「それも許されてない。もしお腹を下したら会社の責任になるでしょう。だから持ち帰ることも禁止されているの。監視カメラも付いている。発覚したら怒られるのよ」

　小枝子の説明でも腑に落ちることは無いみたいだった。だが、小枝子はある意味でこの人を信頼することができた。レーンからはじかれて捨てられるカレーパンを真剣に気に掛けているのだ。そりゃ小枝子だって初めは心が痛んだ。でも途中から諦めてそんな気持ちになることはなくなった。躊躇なくパンを捨てた。それが普通なのだ。

「捨てたらさ、工場の損にならないのかな。これはロスですよ」

「もういいじゃない。きっと工場はロスが出ることも織り込んで利益を見越しているはずよ。この工場は大きくて頑丈なの。私たちが気にすることじゃな

い。ただ流れてくるカレーパンに集中していれば、自ずと利益は出るものなの。そういうシステムだから」

オセロは小枝子の方を振り向いた。マスク越しにも小枝子に何かを言おうとしていることが見て取れた。でも彼は口をつぐんだ。小枝子は恥ずかしくなった。

それから小枝子は色々悩むことが増えた。この工場は一体何者なのだろう。どうしてこんなにも大きくて広いのだろう。わざわざここまで立派な体躯の建物と、最後の晩餐みたいな長い台を使って並べて揚げる必要なんかあるのかしら。大仰な機械や大量の人やトラックを使って作るのは誰のためなのだ。きっとこの会社だって最初は小さな工房でパンを焼いていたはずなのだ。それがいつしか東京ドーム二個分の工場を建てていって、何千人という人を雇って日本の隅から隅まで同じパンを配達するようになった。そのおかげで小枝子は安いパンを食べられるし、雇用してもらえる。つまり結局小枝子は大きくて頑丈な工場のおこぼれに預かっている。安住している。だけど、一見すると機能的な工場は、実は無駄を隠すために無駄を詰め込んでいるから完璧に見えるだけなのかもしれない。いや実際そうなのだ。小枝子は目を瞑っている。だけど本当はオセロみたいな人が、心の中で馬鹿だと思いながらそういう私たちを見ているのだ。カレーパンを眺めるだけの小枝子を見ている。小枝子は泣き出したいように感じた。小枝子だって本当はゴミ箱のカレーパンを全部食べてあげたかったのだ。

元気をなくした小枝子は、連休を使って故郷に帰ることにした。リフレッシュのために。故郷の新潟は車で行くと遠いけれど、唯一心が休まる場所だった。早速小枝子は仕事帰り、レンタカーで身軽なオートマの軽自動車を借りて新潟へ帰った。ウインカーのうるさい車だった。夜に出発して深夜に到着する。そして二日間過ごしてまた埼玉に帰るのだ。

帰っても実家には寄らない。母とは大学生のときに取り返しのつかない大喧嘩をしてそれ以来ろくに会話もしていない。だからいつも新潟に帰るとビジネスホテルに泊まる。それで小枝子は満足していた。両親のふるさとということを抜きにしても、この場所が好きだった。カフェやレストランを探してドライブしたり、大きな公園でお散歩したり、街で買い物したりしてのんびり過ごす。空気や人の雰囲気や時間の流れが小枝子を癒してくれる。

二日目の夜、小枝子はホテルのベッドで寝転がっていた。丸一日出掛けていてくたびれた。さっきラ

ーメンも食べた。今夜はもう寝るだろう。明日の昼までにチェックアウトして車を出さないといけない。それなのに胸がざわざわとした。大きい嘘を吐いた後のような変な緊張感だった。気が付いたら小枝子は涙をこぼしていた。唇が震える。

「こわい。わたしもう、これから何もできない」

自分でも訳がわからない独り言を言った。独りぼっちだった。オセロに謝りたいような気がした。でも何をどう謝ればいいかわからない。とにかくコミュニケーションを取らないといけない。言葉を投げて返してもらわないと。謝って、拒絶されて、怒鳴られて――そういう強い関わりが必要だ。小枝子は彼と話しているときだけは、昔に戻ったような気持ちになれていた。小枝子として誰かと会話できた。一人でいると、自分のかたちがわからなくなる。やっぱり寂しい。そうか、一人なのだ。久し振りに私は寂しいんだ。ベッドの天井を見上げても、オセロのことを思い出す。最近よく話す彼。小枝子の唯一のお喋り相手。でもその顔は小枝子の昔の恋人の顔だったような気もする。

鏡だ、と思って洗面所の鏡を見に行った。そこには小枝子が映っていた。お化けみたいな白い肌に真黒な陰がこびりついた自分だ。だが小枝子にはそれが確かな小枝子なのかいまいち確信が持てなかった。――高校生だった小枝子が美容室で鏡を見たときのこと。小枝子は失恋のせいで長かった髪をバッサリ切った。漫画みたいだけど、本当にそうしてみたかったのだ。ショートヘアに生まれ変わる自分を見て思った。鏡に映る自分が「物」みたいだ。髪を引っ張られるとそちらに頭が動く。一定の間隔で瞬きをする。反応、反射、規則性。さしずめカラクリ人形だった。こんなに人間らしさが無い生き物だったかしらと疑った。小枝子は自分の醜さよりも、ずっと「物」みたいな自分が怖かった。あの日から鏡を正視することをやめた。今の私も鏡をまともに見られない。高校生じゃない小枝子。私は二十八歳の独身の工場勤めのパートタイマー。小学生で学級委員をやって、中学生で初恋をして、高校生で優秀な成績を取って、東京の行きたかった大学に合格して、化粧品メーカーの広告部から職を変えて、埼玉の工場で毎日カレーパンを眺める私。気弱で、生真面目で、周りに上手く溶け込めなくて、好きな人がいて、好きな人がいなくなって、自暴自棄になって、強がりで寂しがりな自分。

「――私は、私の本来性を取り戻さなくちゃいけない」

鏡の小枝子は乾いた唇でそんな言葉を呟いた。ほ

とんど夢遊病のように車のキーを持ち出して部屋を出た。車のエンジンをかけて、ホテルの駐車場を出て行った。ウインカーを響かせながら夜道を運転して、ある場所のコインパーキングに軽自動車を停めた。虫と蛙が鳴く夜道をふらふらと歩いた。田んぼのあぜ道には電柱が杭みたいに打ち付けられている。反対側の道には二階建ての民家が立ち並んでこぼこしている。石塀に当てられた表札の名前は目視だと読めそうで読めなかった。――小枝子には嫌いな場所が四つある。

一つが歯医者。小学生の小枝子が歯医者に行くと、先生にいつも嫌なことを言われた。「甘いものばかり食べたら駄目だ」、「歯は時間をかけて磨かないと駄目だ」、「痛くても我慢しなくては駄目だ」。駄目だ駄目だと言われるから、小枝子は歯医者にいる間、自分が駄目な子になった気分がしたものだ。

小学校のグラウンドも嫌いだ。毎月の朝礼で立たされていると、小枝子は決まって貧血で倒れそうになる。そういうときはしゃがんで助けを求める。すると幼馴染の男の子や先生が小枝子を日陰まで運んでくれる。皆の注目を浴びながら、朦朧とする視界で歩いていく。吐きそうになるけど吐けない。ベンチで寝転がって保健の先生とお喋りする。皆を遠くに眺める。思い出しただけでも辛い。どうせ貧血になるとわかっているんだから、最初から私を立たせなければ良かったのにと思う。でも毎度整列させられて、また小枝子さんが倒れたと言われる。「大丈夫？」と大袈裟に同級生から質問される。二度と朝礼なんか出てやるもんかと大人の小枝子も思う。

もう一つが中学校の体育館。スキー合宿の班決めで、仲のいい友達と同じ班になれず、華やかでかしましい女子の班に入れられた。小枝子は彼女たちから「タエ子さん」、「タエちゃん」と呼ばれた。勘違いなのか意地悪なのかわからない。それ以来、うるさい女もスキーも大嫌いだ。

そして一番嫌いな場所が、この高校だった。小枝子が十年ほど前まで通っていた県立の学校だ。周囲には市街地と田んぼしか無い。雷が落ちるならここの避雷針くらいなものだ。立地も建物も偏差値も平凡な、どこにでもある高校だった。小枝子は柵の外を歩いてみる。夜だけど街灯や周囲の建物のぼやけた光のおかげで全景が窺える。なぜか緑や黄色みたいな光が当たっているそれは、とてもつまらない箱みたいな形をしている。どうして学校はみんな同じような造りになってしまうのだろう。小枝子は不思議だった。

高校の外見は通っていた頃とほとんど何も変わりない。田舎だから不必要に広い校庭やグラウンドを

持っている。ここに毎日何百人もの生徒が集合して、同じ時間に勉強するのだろう。同じタイミングで入学して、同じタイミングで卒業していく。小枝子もそうだった。ここに入ったら、自動的に時間が流れて全員卒業するものだと思っていた。

小枝子はここに来たかったのかもしれないと思い始めた。しかし小枝子の思いをつゆも知らないこの学校は、とてもハードな雰囲気で小枝子を拒んでいる。威圧的な巨体で不穏な雰囲気を醸し出していた。とても歪んでいる。梅雨と田んぼが運んでくる芳烈な生命の匂いを含んで、じめっと命を宿したように居座っている。柵の外からでもグラウンドの土の腐ったような湿り具合や、校舎の壁面の苔のぬめりが伝わってきた。流石にひるんでしまう。だが、ここまで来れば侵入するしかないのだ。もう小枝子は泣いて逃げて解決する歳でもない。やるべきことがここにはある。

正門からの正面突破は諦めた。きっと防犯カメラがあるはずだった。学校内に守衛がいなかったとしても、姿が録画されると危険だ。わざわざご丁寧にも入り口から侵入する必要は無い。どうせ招待された客じゃないのだ。小枝子は学校の周囲に沿って歩き、用水路で隔てられた側道へと周り込んだ。幅一メートルくらいの水路により学校の網フェンスと道路が離れている。まさか誰もここから女が入って来るとは思うまい。小枝子はスニーカーでガードレールを跨いだ。ガードレールは薄闇でもくっきり白く見えた。それから水路に等間隔に渡された十五センチほどの太さの板の上を渡る。どうしてこんなものが必要なのかわからないが、都合が良かった。危なげなくすいすい渡ると、フェンスに手をかけて一思いに登って越えた。二メートル近かったが、今の小枝子には苦でも何でもなかった。忍び込んだ先は校舎裏だ。小枝子は誰かに目撃されていないことを確認すると、身を屈めて一気に昇降口まで駆けて行った。昇降口はガラスの扉が四カ所で建て付けられている。玄関にしては古臭くて無骨で印象が悪い。でもどこか最近見たような既視感があるのは、きっと小枝子の工場と同じだからだ。従業員用の入り口がまさにこんな作りだった。もっと洒脱で洗練されたスマートな素材や舗装がされているけれども、入り口を横に並べて大勢の人が一度に出入りできるように間口をとっているあたり同じだ。扉の開け方も照明の取り付け方も同じだ。小枝子は溜息を吐いて取っ手に手をかけた。

――ガチャ。開かない。施錠されているのだ。当然予期できたことのはずだった。扉は鍵で閉まっている。全て試してみたが同様にビクともしなかった。

小枝子は青ざめて緊張してきた。動悸が激しくなる。神様が帰れと言っているんだと思った。引き返すなら今だぞと忠告しているのだ。小枝子は貧血を思い出した。自分の影もそれに応じて陽炎のように歪んでいる。余計なことを考えないでと自分に言い聞かせた。自分の立ち位置を見失ってはならない。

別の入り口はどこにある？　直感的に思い出したのは体育館と繋がる連絡通路の入り口だった。急いでその場に向かう。通路のドアは見たところ閉まっている。鍵はされているかしら？　小枝子は慎重にドアの取っ手に手を伸ばした。なぜか金属の取っ手は生温かかった。小枝子は唾を飲み込む。ゴクッと蛙の鳴き声みたいな大きな音がした。拒まれている。だけど逃げない。一旦手をほどいて髪を後ろで結んだ。覚悟を決め、祈るような気持ちでえい、とドアを押した。ドアは「ギュッ」と軋んで開いた。

校内の空気は無だった。空洞なのだ。小枝子が入ってドアを閉めると、本当に中の音が聞こえない。足音がコツコツとどこまでも飛んで行き、五階まで届いて反響してくる気がする。空洞というより真空かもしれない。小枝子はそこで自分が土足なのに気が付いた。スニーカーを脱いで入り口の隅に投げた。これで足跡はつかないし、足音もしない。

――ジャーン！　反射的に小枝子は頭を覆った。ピアノの鍵盤をでたらめに叩くような音がしたのだ。小枝子は誰かいるの、と思って怖くなった。息が早まって肺が縮むような気分になる。ジャーン！　小枝子はまた驚いた。

「だ、誰かいるの？　ねえ返事しなさいよ。わかってるのよ」

震えた声は反響してやがて吸収されてしまった。暗い校内には誰もいない。ジャーンと三たびあの音が聞こえた。そのとき小枝子は理解した。自分の足が床につくたび、こんな派手な音が響いているのだ。試しに足を踏み鳴らすと、ジャンジャンジャンと音が鳴る。この世界の理屈はわかった、上等じゃない、と小枝子は心の中で呟いた。でも本当は怯えていた。こんな大きな音がしたら外の世界にバレてしまう。できれば秘密裏に事を済ませたい。だが、穏便でない手段を取った以上そうもいかないのだ。私は無理をしている。

心臓に手を当てて一気に階段を駆け上がった。ジャーンジャンジャンジャンジャンジャン。サイコ映画のような音に小枝子は追われた。焦る必要など無いのに、息が切れて何度も転びそうになった。やっとの思いで三階にたどり着くと、転がり込むように二年六組の教室に入った。机と椅子を五、六個なぎ

倒した。小枝子は息を落ち着けて立ち上がった。額の汗をぬぐう。体が熱い。こんなに身を火照らせて階段を走るなんて高校生に戻ったみたいだ。だが運動に体がついてこない。駄目だ私、と小枝子は思った。気が付くと不快な音はもう消えていた。

教室の空気は乾燥していた。砂や埃が床の表面に溜まっている。しかも無臭だ。枯れた植物を生ける花瓶を横目に、小枝子は教室裏のロッカーを眺める。すべての扉が閉まっていて使われた形跡が無い。なぜこうも静的なのだろう。本当に現在も使われている高校なのだろうか。全てが嘘で作り物のミニチュアみたいだ。しかし疑っても仕方ない。当然のことなのだ。こっちの世界は小枝子の知らない世界で、ある種のことわりみたいなものがこの学校の中で通用しない。いわば小枝子の知らない世界に属している、小枝子のために用意された学校なのだ。

髪をほどいた小枝子は前から三列目の窓際の机に向かった。小枝子が二年生のときに座っていた場所だ。もちろん机の所有権は知らない生徒に渡っている。机自体も入れ替えられてどこかに行ってしまったのだろう。学校というものは機能のことであり、場所のことじゃない。学校の名前や校歌は変わらない。カリキュラムも大体同じだ。それでも机も生徒も教師も時間割も全て置き換わる。建物だって建て替わる。小枝子の記憶や痕跡のような外身は洗い流して、内部で新陳代謝を繰り返していく。そういうものなのだ。

小枝子は髪を耳に掛けた。目を瞑って口を閉じ、机の中央に口づけをした。私の知らない私の席。小枝子はそれを終えると、一気に寂しい気持ちになった。学校が遠くに感じた。

早く帰らないと、と思って時計を見た。深夜の二時？　黒板に「１３、６７」と書かれた文字は何？　なぜ箒が出しっぱなしなの？　――焦るな。こんなことで一々動揺していてはいけない。ここは特殊な空間なのだ。どうして私は取り乱しているのだろう。

本当はわかっていた。さっきから教卓に目を向けられないことに。教卓の前の席は、小枝子の幼馴染の男子の席だった。小枝子の恋人だった人の机があった。馬鹿なのは私の方だ。小枝子は涙を流すことを自分に禁じた。落ち着け、あれは既に彼の席じゃない。あの机の上にキスをしよう。……きっと落ち着くはず。小枝子は歩み寄ると、丁寧に丹念に彼のことを思い浮かべてキスを続けた。この苦い味覚が、彼のくれるものだったらいいのに。彼も小枝子を覚えていて、いつか同じことをしていたらいいのに。それは叶わぬことだけれども。小枝子は枯れた花瓶を持って来て机に載せた。これで封印

した。やるべきことは果たした。小枝子は自分のことを自分で発見できた……ような気がする。
「……はっ」
——ぞくり。小枝子は神経に冷たい氷を流し込まれる感覚を覚えた。背骨から指先まで痺れが走った。後ろにいる物体に自分が反応している。誰かいる。
小枝子が振り返ると、「それ」はいた。眼を凝らしても色は無い。全身が真っ黒で影みたいだ。シルエットを見る限り、身長は小枝子の一・二倍くらいある。肩幅があってどうも男の体格をしていると思われる。異様なのはアタマだ。横に潰れた楕円形でＵＦＯに似た形状をしている。何かのきっかけでへこんだみたいに少しいびつだ。それは生物的な「響き」を持って小枝子の背後に存在していた。小枝子は「生き物だ」と思う。でも万人がそれを生き物だとみなすことは無いだろう。ある人はゾンビに似ていると言うかもしれない。マネキンだと言う人もいるだろう。あるいはカレーパンだと。カレーパンみたいなくぼみの頭だ。不良品で廃棄されるカレーパン。
「あなた、誰よ。こんな場所に居ていいはずがない」
自分を棚に上げて小枝子はそれを責めた。
「あなた、誰よ。こんな場所に居ていいはずがない」と彼は言った。
カレーパン人間は小枝子と全く同じ発言をした。声変わり後の男の声だ。
「うるさい。立ち去らなければ、ぶん殴るわ」
「うるさい。立ち去らなければ、ぶん殴るわ」
「黙ってよ！　目障り。私の人生を邪魔しないで」
「黙ってよ！　目障り。私の人生を邪魔しないで」
「……真似しないで」
「……真似しないで」
「真剣に、やめろって言ってるでしょ！」
「真剣に、やめろって言ってるでしょ！」
小枝子が工夫してもカレーパン人間は小枝子の真似をやめなかった。微妙に小枝子に似ていないことが余計腹立たしかった。女口調が、演技がましくて全くなってない。
「ねえ、私は自分のことが嫌いになった。こんなの私じゃない。真似しないでよ」
「……違うね。特に今の君は美しいよ。君は流れに逆らおうとしているんだね。自ら考えて悪しきものを追い出そうとしている。記憶と向き合おうとしているんだ。だから内側の世界に帰って来たんだね。歓迎するよ。僕はそのためにここに含まれているのかもしれないから。君は不器用なりに、はちゃめちゃに頑張っているもの。要領は悪いね。少し辛口なようだけれど」

カレーパン人間は喋り終えると、一仕事終えたとでも言いたげに肩をすくめた。小枝子はぽかんとして口を開けた。ほのかに油と香ばしいカレーの香りがした。

「あなたは、私を知っている人なの？」

「そうとも言えるし、そうじゃないとも言える。晦渋な説明はしたくないな。そういうのって、華麗に現れて華麗に去って行くべき僕には似合わないから。僕の知っていることをさくっと説明しよう。僕は君の傍でずっと一緒にいたんだよ。小枝子が危なっかしく生きるのを見守っていたんだ。小枝子は意識していなかっただけ。無意識に小枝子は僕と共に生きてきた。今の今まで知らなかっただろう？　だけどここでは無意識も意識も全て引きずり出されるからね。表舞台も舞台裏もない。白も黒も、オンもオフもない。……初めて僕の存在に気が付いただろう？　つまり僕は小枝子を拡大した黒い影のようなものでもあるし、小枝子の自我を照らし出す白い光だとも言える。僕らは一心同体でありながら、少し『ズレて』いる。だから小枝子を支えてこられたんだ。そういうやつだよ」

小枝子には難しくてわからなかった。でもこれが自分の求めていた自我の片割れであって、小枝子が補完したいと思っていた記憶の一部でもあると認めた。

「私が侵入して、口づけするところも見守っていたのね。卑怯者」

「卑怯とは相変わらずひどい言い草だな。僕は君を本気で心配しているのさ。結構君は瀬戸際まで来ていたんだぜ。昔からやけっぱちになって、大事なものまでなげうとうと決め込むのは悪い癖だ。ものは捨てる前によく吟味して選別しないといけないよ」

胃がズキッと痛んだ。きっと小枝子が今まで捨ててしまったものたちが小枝子を恨んで胃まで這い上がって来たのだ。貧血みたいに視界がチカチカしてきた。するとカレーパン人間が小枝子を抱きかかえた。彼はそのまま黒い腕の中で小枝子を抱き締めた。

「カレー臭い」と言った。

「はは。僕は君の性格を好ましいと思っている。何を言われてもパンのように優しく包み込むだけなんだ。君の無事は全然僕に預けてくれていい」

小枝子は彼に包まれた感触を忘れないだろうと思った。強いコミットメントだった。もう充分だ。これ以上深入りしたら、帰れなくなってしまう。カレーパン人間が長い腕を差し伸べる。小枝子は手を取る。彼に連れられ、小枝子は夜の廊下を覗く。

「いいかい？　ここは夜中に見張りが一人で見回りをしている。そいつの目を盗んで逃げるんだ。捕ま

ったら温かいおうちに帰れなくなるよ」
「私にはおうちなんか無い。あるのは仕事とオセロくんだけ」
カレーパン人間はしばし黙った。表情がないので何を考えているのかまでは察することができなかった。そこに足音が届いた。コツコツという乾いた靴音だ。それから放射状に懐中電灯のライトが伸びてきて、小枝子の目の前を掠める。
「小枝子、僕が囮になる。僕の陰に隠れるんだ」
「待って。あなたも見つかったらまずいんじゃないかしら」
カレーパン人間は首を振った。尖ったパン粉のかすが小枝子に当たった。
「いいや平気さ。言っただろう。僕と小枝子は一心同体で光と影なんだ。僕の裏に小枝子が隠れる。するとちょうど存在が打ち消し合ってゼロになる。消えるんだよ。だから小枝子は僕の影になってね」
カレーパン人間が立ち上がって小枝子を背中にくっ付ける。小枝子は手に汗を握った。足音は確実に近付いて来る。すぐそこなのだ。
「面白い仕掛けを見せてやろうか」
カレーパン人間はハンドパワーでも送るみたいに、巡回する見張りに手をかざした。強い想念を送るようにしていると、見張りはびくんと体を震わせて電灯を落とした。ゴンという音が響いた。見張りは神経に氷でも流されたみたいに痙攣してから、懐中電灯を拾い上げる。おかしいなと首をひねっていた。カレーパン人間は鼻を鳴らした。
「何をしたの？」
「いいかい？　将来役立つヒントをあげる。人間は中身と外身に分かれているんだ。外に表れる行動と内なる欲望は別なんだよ。それに対するコミットも当然違う。外身が外身に訴える――暴力なんかのことだね――そういうのは簡単だ。だが中身が相手に訴えることは実は難しい。じゃあ中身を使って訴えるにはどうしたらいいだろう？」
カレーパン人間は拳をぐーぱーした。
「中身からまず中身に伝えるんだ。心と魂をぶつける。念じるだけでいい。中身どうし通じてしまうはずだよ。すると体も無意識に反応してしまうんだ。さっきみたいに、手が震えろと願うと、彼の心に緊張が伝わって、手から電灯が落ちる。こうしてコミュニケーションするんだ。わかる？　愛を伝えるときも一緒さ、小枝子。大事なのは内側から始まるコミットだぜ。さあ、ピリッと緊張感を持って行こう」
小枝子はカレーパン人間の背中にしがみついた。見張りが立ち止まっている間に、ぱっと廊下を駆け抜ける。見張りの視界の範囲を離れたら、

二人で競うように出口まで走った。無我夢中で汗なんか気にせず走った。大きな音を立てている気もした。だけど拘泥せずに突っ走る。階段を転がり落ちるように通過する。一階に戻ると、靴を拾い上げて校舎を飛び出した。戻って来られたんだと小枝子は安心した。蛙の鳴き声がうるさい。じめじめと湿気が漂い、ぬるい風が吹き抜ける。血色の悪い電灯があちこちにある。無性におなかが空いた。

「おめでとう小枝子。小枝子は昨日までとは違う新しい小枝子になっているはずだ。そこには僕がもう含まれていない」

カレーパン人間は校舎から出られないようだった。入り口にずっと立っていた。小枝子は涙を流しそうになった。彼を置いていくなんて私が悪者みたいじゃないと思った。

「君は僕がいなくても一人立ちできるよ。子供じゃないんだ。お互い順調に歳も重ねている。これからは僕なしでも幸せになるんだ。小枝子……その、頑張ろう。お互い」

「大好きよ」

小枝子は彼の首に手を回した。彼の頭を自分の口元に引き寄せる。ここで見てもやっぱり顔が暗くてよく見えない。今となってはこんなものね、と思った。そして小枝子はバリバリとその頭を食べてしまった。カレーパン人間は抵抗などしなかった。ジューシーな衣と濃厚なカレーが小枝子の腹に収まった。そして生々しい首から下だけが残った。小枝子はどうしようかしら、と思ってごめんなさいと拝んだ。それは放置してしまうことにした。明日おおごとにならなきゃいいのだけれど。小枝子はスキップしたくなるのを堪えて、車まで戻った。翌朝、目が覚めると小枝子は新たに生まれ変わっていた。

連休明けの出勤日で事故が起きた。小枝子は事務所で始末書を書かされていた。その紙では架空のカレーパンを何個も各地に移動させ、結局数をゼロにしなければならなくなっていた。書写した長文を爪を噛んで眺めても、何一つ納得できない。事故の顛末はこうだった。

――小枝子は珍しく仕事に退屈を感じていた。正確に言うなら、今までも退屈だったことはある。ただ耐えがたいほどの退屈に追い込まれたのは久し振りだった。小枝子は思い付きでオセロの背中にこつんとパンチした。若い杉の木みたいな背中だった。

「なんでしょう？」

「私じゃないよ。カレーパン人間のせいだよ」

「祟りに来たんだ。俺たちが粗末にするから」とオセロは笑顔を浮かべた。小枝子は心からそういう表

情が見たいのだった。
「私、この前の休みで新潟に帰ったの。親には会わなかった。お母さんに会いたくなかったから。向こうは田植えが終わっていて青田が綺麗なのよ。写真見せたいくらい。それでね、カレーパン人間にも会った」
「へえ。お土産ないんですか？」
「お土産は無いの。今度渡すね。と言っても、次はもう無いか」
「うん、俺がお土産を用意する番じゃないですか」
「やめてよ。もう会わないでしょう」
　会話に集中していたのは、ほんの一分ほどだった。二人が目を離したその隙に、ボンと音がして機械が緊急停止した。どうやらいびつに膨らんだ形のカレーパンを見逃したことが原因で、機械に黒く焦げたパンが詰まり、次々パンがつかえていって、機械とベルトコンベアーを圧迫して破損したらしかった。すぐにチーフとエリアマネージャーがとんで来て調査した。その間、小枝子とオセロとおばさんは「申し訳ありません」と何度も謝る。結果、機械を一時的に止めて予備の部品を取り付けて作業しなければならなくなった。ベルトコンベアー上のパンや、油や生地やカレーは全て廃棄になった。二百六十二個のロスだ。予想外の事故なので特段怒られたわけではなかったけれど、昼休憩中に小枝子が代表して始末書を書かされている。機械のどこで破損が起きて、ゴミになったパンをどう処理したか、指示通り一々詳しく書き写さなければならない。いくつ自工場で補えるのか、別の工場や倉庫から在庫をいくつ引っ張るのかを伝えられている。トラックの分布や固まっている在庫の大小に応じてカレーパンはアッチコッチに動く。黒いインクの数字が増減を繰り返す。めまいがするほど複雑だ。だけど、二時間機械が止まったところで結局商品が足りないことは無かった。
　ペンをカチカチ鳴らして溜息を吐くと、目の前の白い会議机でコツンという音がした。黒い影の先には不愛想な缶コーヒーが立っている。顔を上げると白いシャツのオセロがいる。
「小枝子さんは何も悪くないんですから。何か言われたら全部俺の責任だと言って下さい」
　照れ隠しなのか言い方がぶっきらぼうだった。小枝子はカレーパン人間に言われたことを思い出した。
「愛を伝えるときも一緒さ、小枝子。大事なのは内側から始まるコミットだぜ」。
　――小枝子は素直に打ち明けると、寂しい。オセロが出国するまであと数回しか会えない。もちろん彼がいたところでお喋りをするだけだ。仕事の効率

は下がっても上がることは無いだろう。だけど私には反応する他者が必要なんだ。何よりも求めているのはそれなんだ。私は電車で肩がぶつかったり、テレビやラジオで面白い話を聞いたり、会社の人と挨拶するくらいじゃちっとも満足できないんだ、と小枝子は念じた。寂しいと彼にメッセージとして伝えるだけ。テレパシーで気持ちを理解してもらうだけでいい。小枝子に見つめられたオセロは目をしばたたかせた。

　最終的に小枝子は何も伝えずタイムカードを切って退社した。小枝子の足は繁華街に向かっていた。自宅のある駅はすぐに通り越してしまった。スーツの人や制服の学生が四方八方からやって来る混雑したコンコースを抜けて、レストランや飲み屋が立ち並ぶ街に出る。話し声が大きい。耳でこだまする。照明が明るいぶん、屋根や建物の影が暗くて嫌だ。

　小枝子はあてもなく数時間歩きとおした。疲れて電柱の下に体育座りしていると、路地の反対に制服を着た女の子が二人で話しているのを見つけた。彼女らは深刻そうに話し込んでスマホを眺めている。何をしているのだろう。小枝子は直感的にまともに学校に通っているわけではなさそうだと察した。あの制服は年齢を示すアイコンみたいなものに過ぎない。そもそもこんな夜遅くに出歩いていて、補導もされず親から叱られないのは不自然だ。さてはこういうのに慣れている。小枝子は近付いて行って声を掛けた。

（ねえ！　あなたたち何してるの？）自分の声じゃないみたいだ。

　二人は小枝子の大声に戸惑った。小動物みたいにキョロキョロ辺りを見渡した。人がどんなに多くても立ち止まる者はいなかった。髪の長い方が、

「何よおばさん。かまわないで」

（あなたたちこんな時間にこんな所にいて親御さんに怒られないわけ？）

「やめて。おばさん、シエンの人でしょ。帰ってよ」

　小枝子は「シエンの人」が何なのかわからなかった。だから訊き返した。警戒心を露わにするショートヘアが、

「シエンの人はおばさんみたいな女で、私たちに声を掛けるの。『家出したい気持ちはわかる。私もそうだったから。ちょっとお話ししよう』って。それで話し合いすると、シエンの人のホームに連れて行かれて、次の日警察に引き渡されて、家まで戻されて、親に嫌なこと言われて殴られるの。また家出するとシエンの人がやって来る。そのループ」

　二人の視線は猜疑心の集合体みたいだった。捨て

犬みたいにみすぼらしい。
（そういう循環系統を生み出している人の総称なのね。よくわかった。でも安心して。私は小難しいシステムには疎いの。どちらかというとあなたたちと同じグループよ）
「うるさいな。帰って」とどつかれる。
（もっと話しましょ。どうやって生活してるのよ。お金ないでしょう？）
「お金くらい稼げるわよ。ご飯食べさせて、寝る場所用意してくれる知り合いもいっぱいいる。私たちのこと舐めてるの？」
　小枝子は目頭がじんと熱くなった。会話していると思った。人見知りの自分を克服したような気持ちだった。綺麗な形ではないけれど、私にも感情を上手く言い表せるのだと思った。
（今晩一緒に遊びましょうよ。お姉さん一人なんだ。お金はあるの）
　小枝子は財布から七枚のお札を抜き出した。そして髪の長い方の胸に札束を押しつけた。何度も押すと、彼女は嫌がってショートヘアの裏に逃げ込んだ。
「おばさん、そういう感じなの？　それとも変な人とグル？」
（私は二十八歳の独身でパン工場で働いている新潟県出身の渡辺小枝子。言ったでしょう。一人だって。お金が欲しいならこれの倍は払ってもいいわ。だから色んな所で色んなことして遊びましょうよ）
　二人は怯えていた。この子たちも学校に馴染めなかったんだろうなと思うと、小さな良心が頭をよぎった。けれど興奮状態の小枝子には行動を押さえ込むだけの力が無かった。札束でショートヘアの胸を何度も叩く。ショートヘアはカラクリ人形のように手を出しては引っ込めることを繰り返した。そんなに自分は怖いのか。小枝子だって真面目で可憐でいじらしい女子高生だったの、と教えてあげたかった。でも口で言ったって信じないだろうなと思う。学生の頃の小枝子も大人の言うことと全部反対のことをしていた。
「何やってるんですか、小枝子さん」
　現実に引き戻したのはオセロの声だった。オセロは小枝子に傘を差し出し、札束をひったくった。顔が赤いのを見ると、先ほどまで誰かと酒を飲んでいたようだ。グレーのシャツを着た彼は、小枝子にヨシヒロを思い出させた。小枝子の恋人だった人。
「さ、ちょっと話しましょう。とにかく雨が凌げるところで」
　雨が降っていることなんかちっとも気が付かなかった。そう言えば朝から雨が降っていたのだった。小枝子は濡れた肩を掴まれてオセロに連れて

行かれた。少女たちも瀬戸際にいるんだ。最後に見えた二人は、ただ唖然として黒いタイツの脚で棒立ちしていた。私みたいにならないで。

小枝子はタオルをかぶってオセロに案内されたバーのカウンターに座っていた。友達がバイトしていてよく来るんです、と言った。五階だから景色はいい。照明が若干足りなくて足元が見えづらいけれど、雰囲気があっていい場所だ。つるつるに磨かれた木目のカウンターにグラスが置かれる。綺麗なものが飲みたくて、空色のカクテルを作ってもらった。オセロはライムを加えて限りなく薄めたジンに時々口をつけていた。店主の髭のおじさんは注文を受けると速やかにその品を出し、それ以外はずっと黙ってグラスを磨くか、ＬＰのジャケットに向き合って選曲をしていた。

「小枝子さん、平気でした？　怪我してない？」

オセロは気遣いながらそう切り出した。彼のシルバーの細いネックレスが鋭く光を反射した。小枝子はしゅんとした。「助けてくれてありがとう」と言う。

「驚いたな。店を出たら小枝子さんがお金渡してるんだもの。二度見しました」

彼はカウンターに右肘をついて笑った。手にはグラスを掴んでいる。私はここらで白黒つけないといけないと思った。

「よく声掛けてくれたね。誰かと一緒だったんでしょう」

「まあ……まあそうですけど。今日の小枝子さん元気なかったから。気を付けてくださいよ。弱った気分のときは意地悪な人が寄って来るんです。気分みたいなものは周りに伝わる。次、お金巻き上げられそうになったら連絡してください」

今度は小枝子が笑った。本気で私がカツアゲにあったと思い込んでいるんだと思った。小枝子は結局いい子に見られるように出来ているのだ。昔から同じだ。誰も小枝子が悪いことを企んでいるとは思っていない。勝手に騙されているならそのままでいいや。オセロには好かれたままでいたい。

「もしも私が女の子にお金渡して、悪いことしようとしてたら怒る？」

「そんなわけないでしょう。傍から見た限りでは、小枝子さんの横顔は助けて欲しいって訴えていましたよ。大体わかります」

オセロはグラスを振る。氷も震える。小枝子は自分が女の子を脅迫していたのか、脅迫されていたのか記憶が混濁してきてしまった。だが真実はどちらでも構わないのだ。小枝子が後悔しないために今すべきことは、彼に寂しさを伝えることだ。せっかくの機会を逃したらいけない。彼から見ても、私はた

だのカレーパン女なのかもしれない。それでも、
「オセロくんが辞めたら、私がどう思うかわかる？」
「……俺が留学することを面白いと思ってないんでしょう？　わかります。いやまさか、サミシイんですか？」
どうして伝わってしまうのだろう。小枝子は喜べない。怖かった。小枝子は感情が表に出ない不思議な子だと言われることが多かった。しかし彼には感じられるのだ。
――高校時代の話だ。二年生の小枝子は窓際の三列目の椅子に座って雪を眺めていた。ストーブの灯油がひどく臭う日だった。朝、登校してぼんやりするのが日課だったが、教卓の前の席に、とある男子が来ないことが気掛かりだった。小枝子の彼氏の須田義弘だ。不思議に思っていると、先生が入って来た。神妙な面持ちなので、生徒たちは瞬時に良くないことが起こったぞと察した。皆が黙って席に座ると、男の担任はこう言った。「須田だが、今朝の登校中に交通事故に遭ったそうだ。容態は相当厳しいらしい。詳しい話はまだだから、余計な騒ぎは起こさないように」。それだけ言って、再び教室から出て行った。「え？」と悲鳴に近い声が上がった。教室全体の空気が凍り付いた。義弘は穏やかで人当たりが良く人気者だったのだ。小枝子はというと、言葉だけでは彼の死の実感が全く湧いてこなかった。意味もなく焦りみたいな感覚を覚えた。小枝子が義弘と恋仲だと知る女子たちは、小枝子の所まで来て慰めようとした。でも小枝子はどう悲しんだらいいかよくわからなかった。ただ、焦っていた。二時間目の終わりには正式に彼が死んだと伝えられた。
悲しみが訪れたのは突然だった。小枝子がお昼休みに友達とお弁当を囲んでいるときだ。ミートボールを齧ったら、中にうずらの卵が入っている。サプライズだと思うと同時に小枝子は机に泣き崩れた。声を上げて嗚咽を漏らして泣いた。つられてクラスメイトの女子も数名泣いた。小枝子だけは昼休みが終わっても涙が止まらなかった。保健の先生に早退していいと言われて、小枝子は一人で昼間の町を帰ることになってしまった。涙は完全には乾かなかった。駅から家までは自転車を使うのだが、そのときは遠回りをした。早く帰ると家にいる母に不審がられるから、なるべく時間を稼ぎたかったのだ。
偶然選択したルート上に、ちょうど義弘の事故現場があった。そこは田園が広がる見通しの良い農道だった。事故現場は用水路になっている川が下を通る橋だ。既に事故車両は片付けられていた。六人の警察官が写真を撮ったりメモを取ったりしていた。小枝子は自転車を降りて、そのうちの一人に声を掛

けた。
「ねえ！　高校生が交通事故に遭ったのってここですか？」
　分厚いコートを来た中年の警官は足元の雪を払いながら答えた。彼の知人だと気付いたはずだった。話すたびに淡い白い息が飛んだ。
「そう。朝にじいさんが運転する軽トラにはねられて亡くなった」
「……ソクシですか？　シインは？　詳しく知りたいんです」
「凍死。体温が下がって、心臓が止まっちまったらしいんだ」
　トウシ？　小枝子は理解が及ばず混乱した。どうして車にはねられて、よりによって凍死しなければならないのだろう？
「後ろからどうも車体に突き飛ばされたみたいでね。どーんって背中に当たって、橋の脇から川に落ちたんだよ。川はほら、幸い浅いんだけど如何せん水が冷たくて半分凍ってるから、運転手と通り掛かったばあさんじゃ引き揚げられなかったみたいで、被害者の彼も顔を出して初めはうんうんうなって意識があったらしいけど、雪ん中救急車寄越したときにはもう心肺停止だったよ。腰が折れてて手足は凍傷で、搬送中に亡くなったって」
　小枝子は絶望した。どうして車にはねられて死ななくて、川に落ちて溺れなくて、それなのに凍死しちゃうんだろう。きっと傷がズキズキ痛くて、冷水が皮膚に突き刺さって苦しみ抜いて死んだはずだ。あまりにむごい。神様がいるなら、善人の彼にこんな殺し方をしないだろう。どうして……という黒い疑問ばかりが小枝子の内側に生まれた。
「なにも責任感じることは無いよ。運転手の不注意が原因だから。――彼も君にも罪は無いんだよ」
　小枝子はなぜか何度もお礼を言って立ち去った。それから三日三晩引きこもって泣いた。葬式に呼ばれたけれど、誰かが決めた儀式をやって、はい終わりという気分になれなかったから欠席した。あれから小枝子の日常は歪んでいった。この傷は一生私が抱えるべき傷だった。小枝子は同じ思いを誰にもして欲しくない。だから今オセロと向き合わないといけない。
「君には、大事な人がいるの？」
　オセロに恋人がいるのなら、その子を放って海外に行くなんて絶対にいけないと思う。たとえ可能性がわずかでも、今生の別れになるかもしれない。もしそうなれば彼女はどれだけ苦しむだろう。一生後悔させるはずだ。
「……小枝子さん。俺たちはそういう関係じゃない

でしょ」
「お金が無いなら、さっきの渡すから。別れる前にきちんと会って話さなきゃ駄目だよ。手紙も書くんだよ。身勝手に捨てたら、彼女は必ず一生苦しむんだからね」
小枝子は必死に訴えた。オセロは悲壮感のある表情で小枝子を見つめた。それからグラスをあおって苦い顔をした。肘をついた腕で額を押さえて溜息を吐いた。小枝子は真剣に見つめた。
「気持ちは嬉しいけど、俺はもうたぶん小枝子さんとは会えないから」
話は上手く通じていなかった。馬鹿な男子って本当に嫌い。鈍感な男子はもっと嫌い。だけど、オセロは馬鹿なりに可愛いところがある。
小枝子の彼氏と同じだ。――小枝子が間違って告白したとき。
「ねえ聞いてよ。義弘、カレーパン好きでしょ？」
と訊くと、
「ねえ聞いてよ。義弘、カレーパン好きでしょ？」
と真似される。
「なんで真似するの？　うざい」
「なんで真似するの？　うざい」
「真似してるのはそっちでしょ。もう口利かない」
「真似してるのはそっちでしょ。もう口利かない」
「こんなことなら一緒に帰らなければ良かった。大嫌い」
「こんなことなら一緒に帰らなければ良かった。大嫌い」
「……。うそ、好き」
「……。うそ、好き」
「えっ。僕は小枝子を愛してる。僕と付き合ってください」
「僕は小枝子を愛してる。僕と付き合ってください」
「うるさい。やめて冗談でしょ。百年愛せるの？」
「ねえ冗談じゃない。僕は真剣に話してる。百年愛すよ」
それから二カ月と十六日だ。彼が亡くなったのは。ずいぶん馬鹿な約束をしたと思う。けれど今になって少しだけ過去を許せたような気がする。本気で義弘が好きだったのだ。地味でひねくれた、自分らしい恋愛。思い出すと恥ずかしいだけじゃないの。小枝子は大人として優雅にカクテルを嗜んでみせた。涙は見せずに余裕の微笑を浮かべてあげる。
「まあいいの。お達者でねってことだから。寂しいけど応援してる」
「どうも。俺はあなたのような人のこと忘れませんよ」
小枝子は彼が帰国する頃にもカレーパンの工場で

働いているだろうと思う。たまたま罪も無く廃棄された二百六十二個のパンのために償う意味も込めて。そうでなくても小枝子はあの仕事に適性があるのだ。天職というやつだ。プライベートで会うのは最後だろうとオセロのことを眺めた。店内に流れ始めた陽気なジャズを耳にして、小枝子は足でリズムを小さく刻む。彼は見つめられるのに慣れていないのか、照れて目を逸らすと顎に手をやったりした。義弘も生きていたらこういうハンサムになれたのかしら。あの田舎者。グラスを覗き込んでみた。

「え」

――突然のことで小枝子は息が止まった。曲が終わるタイミングで音楽も止まる。慌てて両手を動かしてみた。オセロは何を踊っているのだろうと呆れて笑う。小枝子はまっさらなカウンターを覗き込み、天井を見上げた。吊り下げ式のＬＥＤ電球が白い光を放っている。嘘でしょう。血の気がスーと引く。どうして今まで気が付かなかったのだろう。

「何かありました？」

小枝子の影がないのだ。

「透明人間、簡単に消えた」

桑島　直寛

■受賞のコメント■

小説は書きたい人間のためにあるのではなく、書かざるをえない人間のためにある。「なんとなく小説家になりたい」人間を僕は否定する。これは僕の血をインクに、骨のペンで書いたものだ。中途半端な気持ちで「俺も書けるかも」なんてやつ、全員やめちまえ。

この作品を書いたとき、本気で好きだった子にフラれ、特技の落語にも活路を見出せず、人間関係もうまくいかず、人生のどん底にあった。そんな時に、死ぬ代わりに、書いた（僕の大嫌いな奴が全員苦しみ死ぬまで、生きて、生きて、生き抜いてやる）。

エピグラフにも挙げたが〈自分の生きている事が、人に迷惑をかける。　ぼくは余計者だ。」という意識ほどつらい思いは世の中にない。〉（太宰治『パンドラの匣』）がこの作品を表している。あとは読者に解釈を委ねよう。

明治大学連合父母会の方や大学の方にはいつもなにかとお世話になっている。与えていただくばかりでいつも恩返しできないことを歯がゆく思っていたが、今回受賞でひとつ恩返しできたのではないかと思う。この賞に携わったすべての方、これまで支えてくださった大好きな人たちにこの場を借りて感謝申し上げる。

透明人間、簡単に消えた

「自分の生きている事が、人に迷惑をかける。
ぼくは余計者だ。」
という意識ほどつらい思いは世の中にない。
太宰治『パンドラの匣』

＊＊＊＊＊

夏休み明け最初の授業、ゼミの女の子が男と手を繋いで談笑しているのを目撃した帰り道、ぼくは自分の指先が透けていることに気が付いた。ガラス細工のような透明な指先を通して、電車の座席が見えた。ぼくはミラン・クンデラの『存在の耐えられない軽さ』を読もうとしていた。ついタイトルに惹かれて買ってしまった。電車の中で本を取り出そうとカバンに手をやったら、ぼくの指先が半透明になって、透けていた。ぼくの掌から指先だけが消滅したようにも見えた。

夏休みに映画デートに誘った女の子との連絡が途切れ、ぬるい絶望に浸っていた。それでも、夏休みは終わって、大学は始まった。

最初の授業は、フランス語だった。ぼくはT先生から発音を二度も注意され、小テストに不合格になった挙句、授業後に呼び出されて課題の不備を指摘された。一人で落ち込みながら、五限終わりの夕闇の中を歩いた。

駅の近くにあるチェーンの居酒屋の前で、同じゼミのFという女子を見かけた。彼女はぼくと同じ専攻で、いつもロングヘアーを後ろで束ねている。

彼女のことが前から少し気になっていた。あまり話したことはなかったけれど、品川区の高校出身で、高校時代はダンス部を、大学ではマス・メディア研究会に所属しているということを知っていた。

ぼくはしばらくFの方を見つめていた。すると、Fのところに、ぼくより背が十五センチほど高い男が来て、彼女と手を繋いで駅の方まで歩いて行ってしまった。

そのまま、慌てて二人の後を追いかけた。あまりに唐突な出来事に、ぼくは事態を飲み込めずにいた。ぼくが駅前の京王マートにさしかかったところで、二人が楽しそうに話しながら改札をくぐり、手を繋いだまま新宿方面のホームへ階段を上っていくのが見えた。

夜の喧騒の中、ぼくはただ、呆気にとられるばかりだった。

＊＊＊＊＊

よくあることだ、こんなの、よくあることだ、と

何の効き目もない慰めを唱え続けて、気が付けば経堂駅で急行に乗り換えるのを忘れていた。各駅停車本厚木行きは、ぼくをおちょくるようにのろのろと走った。その横を、快速急行が風のように走り抜ける。

小田急線は狛江に到着した。途端にどっと人が下りていく。ぼうっとして降りそびれるところだった。慌てて荷物をまとめて降りた。改札をくぐろうとしたら、ＰＡＳＭＯケースが見つからない些細なことにも、腹が立った。カバンを開け、ＰＡＳＭＯを探した。

指先は、まだ透明だった。

ようやくのことで改札をくぐる。大学寮は、曲がって左に歩いて五分のところにあった。

大学寮に戻る頃には二〇時を回っていた。

早く食堂に向かおうと思ってエントランスを抜けようとしたら、中庭に二つの影を見つけた。吉田美乃梨と、商学部の安住さんだった。ぼくは二人を無視して通り抜けようとしたら、安住さんがこちらに気が付いたらしく、ガラス越しに手を振ってきた。ぼくは愛想笑いを浮かべて、手を振り返した。

「宮島くん、お疲れー」と安住さんは言った。いかにも女子ウケしそうな高い声が不愉快だった。彼の肩に、美乃梨が寄り掛かっている。中庭は二人によって独占されていた。

ぼくはお道化の笑顔を保つのに躍起になりながら、なるべく早足でそこを通り過ぎ、食堂の方に向かった。安住さんは彼女に夢中で、また美乃梨のほうも彼氏しか視界にないらしく、ぼくの指先には目をやらなかった。ぼくは二人を睨んでいた。

中庭が見えなくなってから、ぼくは思わずこぶしを握った。

すると、指すべてが半透明になって、ぼくの手は今にも空気の中に溶けだしそうになっていた。

食堂の中の席は一年の寮生と、六人組の女子に占領されていて、騒がしかった。

空腹は耐え難かったが、あちこちから下世話な話が聞こえて、食堂に取り付けられたテレビの音が聞こえなくなるほどの騒がしさのなかで、とても飯を食う気にはなれなかった。

仕方なくエレベーターの方に引き返す。エレベーターを待つ間、中庭から美乃梨のじゃれるような嬌声が聞こえてきて、思わず耳を塞ぎたくなる。エレベーターがやってきた。逃げるように乗り込んで、感情的になりながらボタンを押す。

部屋に戻ると、カバンを放り投げて、シャワーも浴びずにベッドに寝そべる。ベッドはみしっ、という音をたてた。空腹は、もうどうでもよくなってい

た。

ベッドに転がったまま、器用に黒い長袖のインナーを脱ぎ捨てる。左手から、ザクロの口のようなリスカ痕が、一、二、三、四、五、六……、縞模様にぼくの腕に刻まれていた。

ぼうっと、自分でつけた未遂の痕跡を、透明な指先で数える。指から手にかけて、もうすっかり半透明になっていた。黒死病に犯されると手が黒くなるというが、まるでそれとは逆に、手と空気が一体化していくように見えた。

「なんで透明になるか、わからないって顔してるな」

リスカ痕が唇となって、しゃべり始める。唇はせせら笑いながら、ぼくのことを小ばかにしている。そして、六つの唇がいっせいにぼくの方を向いた。

「お前はじきに消え去る。お前には、何の存在価値もない。お前は余計者だ」

ぼくは黙って左手の六つの唇を見つめていた。そして、あかり先輩のことを考えた。

「消える、お前はじきに消えていなくなる……」

ぼくは立ち上がると、散らばった机の上に置いてあるカッターナイフを手に取った。そして左腕の縞模様に向かって、勢いよく縦に切り込みを入れた。唇は消えた。ぶらん、と力なく腕を下す。透明な指先からルージュの血が滴ってぽた、ぽた、と床を染めた。

カレンダーを見た。やはり、九月九日だった。あかり先輩と彼氏の、半年記念日だった。ぼくは血まみれの手で机に置いてあるミニカレンダーをつかんで、ゴミ箱に放り投げた。

＊＊＊＊＊

あかり先輩と出会ったのは、いまからもう半年も前のことだった。つい昨日のように感じる。彼女との出来事が、すべて生々しい記憶として、ぼくの中で再現される。

彼女は、ぼくと同じ大学寮に三月まで住んでいた。彼女は法学部で、香川県の高松の出身だった。ぼくは彼女に一目ぼれした。

彼女と仲良くなりたい、けれどそれ以上に嫌われ、拒絶されることを恐れていた。仮に声をかけることができても、彼氏がいたら？

ぼくはいつも、臆病になっていた。

結局、ぼくはわがままだった。自分は傷つきたくないけれど、彼女とは仲良くなりたい。そしていつも一歩踏み出すことを躊躇っていた。彼女を寮の食堂で見かけるたびに、もどかしい想いに胸が押しつぶされそうになった。

あかり先輩に初めてやりとりをしたのは、なんの偶然だろう、十二月の二十五日のことだった。

クリスマスの寂しさせいだろうか？
冬の寒さのせいだろうか？
なぜだろう。大学最初のクリスマスを、友人とバカ騒ぎした後で、ふと胸に寂しさがこみあげてきた。泣きたいくらいの気分だった。徹夜明けに寮に戻ったその時、窓の外に降り始めた雪が、妙にぼくをしんみりした気分にさせたのだった。そして、ぼくの存在がこの雪のように儚く、小さなものに思えてきた。
寝不足ままぼんやりと死ぬことについて考えた。そして急に怖くなった。このまま消えてしまえば、きっと後悔するだろう。
あかりさんに声をかけよう。そんな決心をしたまま、気が付けばまどろんでいた。
彼氏はいるのだろうか？
彼女は、昨日と今日を、誰と過ごしたんだろう？
彼女のすべてを知りたい。このまま、消えたくない。
起きると、十六時を過ぎていた。八時間ほども、気を失っていた。
その日ぼくは、食堂で夕食を取っていた彼女に、ぎこちなくしゃべりかけた。その日彼女と友達になった。

＊＊＊＊＊

あかり先輩はこれまで出会ってきたどの女の子よりも優しかった。ミディアムヘアの髪をしていて、彼女からはあまい香りがしていた。彼女は丸っこい讃岐弁を使って話した。都会にも染まらず、田舎の素朴さと優しさが、彼女の美しさそのものだった。
彼女はぼくのことを「ナオタロウくん」と呼んだ。
毎晩食堂であかり先輩が来るのを待って、なるべく彼女と一緒に食事をするようにした。バイトのシフトを調整し、夜にはなるべくはいらないようにした。収入は減ったけれど、それでもよかった。彼女と食事をして、少しの時間話せることが、一日の唯一の楽しみになっていた。
彼女は、いろんなことを話してくれた。back number が好きだということ、渋谷にお気に入りのカフェがあって大学終わりによく行くこと、そして高松のこと。
あかり先輩は、地元愛にあふれていた。香川ってとってもいいところよ。瀬戸内海とかとっても綺麗やけん、父母ヶ浜って知ってる？　一回行くといいよ。ウチ、めっちゃ好きなんよね。夕日が綺麗で、地元の推しスポット的な？
けれど、ぼくはまだ次の一歩を踏み出すことができずにいた。彼女との交流を楽しみながら、一方でいつもぼくは不安定な気持ちでいた。

一月の終わりがけの夜、ぼくはその日、たまたま寮のエレベーターの前で、あかり先輩に遭遇した。彼女は寮の前にあるコンビニから帰ったところらしく、ぼくは彼女に声をかけた。そして少し話しませんか、と言った。彼女はいいよ、と言った。ぼくの胸は高鳴った。

時間は二十三時を回っていた。エントランス、中庭、食堂には誰もいなかった。

ぼくはあかり先輩のうるんだ眼を見つめた。ルビーのように輝いていた。彼女の視線と、ぼくの視線が重なる。拍動が早まる。優しい沈黙が訪れた。

「あの」

沈黙を破ったのは、ぼくだった。

「あかり先輩って、彼氏さんいるんですか？」

彼女は少し恥ずかしそうに、

「今は、いないよ」と言った。そしてごまかすように「推しならいるよ」と冗談めかして言った。

「あ、そうなんですね」

また、優しい沈黙が、二人を包んだ。

「好きです」と、今にもこぼれそうだった。いや、こぼしてしまえばよかった。なんで、言わなかったんだろう？

そこからぼくらは、いつもみたいにたわいもない話をした。そして、十分ほどして、「今日はこのくらいにしよっか」と言われて、別れた。彼女の、コーラルピンクのネイル、水色の宝珠のついたネックレス、クリーム色のロングスカート……ぼくは、今までで一番美しくて、そして今までで一番後悔しているこの日の夜を、忘れない。

たった四文字、何気なく一言を言えなかったために、ぼくらは後悔しなければならない。

＊＊＊＊＊

二月は免許合宿で、約二週間もの間、寮を空けなければならなかった。あかり先輩に十四日間も会えないのは、苦痛だった。こんな時に、どうして合宿なんて入れたんだろう。激しく後悔した。

雪の米沢での日々は過ぎた。こちらでの非日常や体験は常に新鮮だったけれど、ぼくの頭の片隅には、いつもあかり先輩のことがあった。ＬＩＮＥを送って、しつこすぎやしないか、でも送らなすぎるのは寂しいというジレンマに苦しんだ。

ぼくは、あかり先輩の中に、日常や喜びを見出していただけでなく、彼女の中に、ぼくの存在価値そのものまで見出していたのだった。あかり先輩が、ぼくのすべてだった。

仮免に受かり、実技も合格。延泊になることもなく、無事に合宿は終わり、新幹線に乗って帰った。明日から三月だった。

帰りの新幹線で、ふと思いたって、彼女にＬＩＮＥを送った。
「あかり先輩、免許合宿終わりました」
「お疲れー」とレスがきた。
「どうだった？」
「初日から雪がヤバかったです（笑）」
そしてぼくは話を切り出した。
「あの、三月、遊びに行きません？」
断られる、と思った。初めから、何の期待もしないようにしよう。期待するから、裏切られる。と思いつつも、ぼくは彼女からの返事に、ほんのわずかな希望を抱いてもいた。
「いいよ」
！
「ありがとうございます」
「どこにしようか」
「神保町とかどうですか？　おすすめの喫茶店があるんです」
ぼくは彼女に「さぼうる」のリンクを送り付けた。ラジオドラマにも登場する、レトロ喫茶店だった。
「いいよ！　行きましょう」
新幹線の中で、ぼくは叫びだしたくなった。
「いつにします？」
「三月は忙しいから、四月になってからでもいい？」
「もちろんです」
ああ、希望と絶望は紙一重だということに、ぼくはこの時まだ気づかずにいた。

＊＊＊＊＊

三月が終わった。
四月も終わった。
一度だけ、連絡をとってみた。あかり先輩から、返信が来ることはなかった。
気が付けばゴールデンウィークにさしかかっていた。五月の九日のことだった。昨年の基礎ゼミでお世話になった教授から博物館の招待券をもらった。台東区にある、樋口一葉の記念館だった。今年は一葉の生誕一五〇年にあたるらしく、教授に招待券が何枚か届いたらしかった。
一葉記念館を見た帰り、ぼくは三ノ輪駅にあるすき家でチーズ牛丼の特盛を注文した。
牛丼が出てくるのを待つ間、インスタを開いた。
あかり先輩のストーリーが更新されていた。画面をタップする。
一面に広がるネモフィラ畑。そこに写る、二つの影……、

～２ｍｏｎｔｈ～

なにかを考える間もなく、ぼくは全身が崩れるような感触に襲われた。運ばれてくる牛丼の臭いに、思わず嘔吐しそうになって、厠に駆け込んだ。一口も牛丼を入れることができず、会計はしたがお釣りを受け取るのも忘れ、死にたいような気持ちで帰った。

あかり先輩の、ばか……。

＊＊＊＊＊

あかり先輩に彼氏ができたと知ったその日、ぼくは初めてリストカットをした。

ぼくなんて、いらない。

ぼくなんて、消えちゃえ。

ぼくを、殺してやる。

そしてぼくは、生きるために、初めて、カッターナイフで、自分の左腕を切った。左手にほとばしる熱さに似た痛み。射精の瞬間とも、少し似ていた。彼氏は、あかり先輩を犯すときに、この快楽を味わうんだ。

ぼくは、あかり先輩と彼氏が、どこかに出かけるたび、インスタに二人の痕跡がアップロードされるたびに、自分を否定した。彼女は、ＳＮＳ越しに、ぼくをせせら笑い、彼氏を特別視するのと同時に、ぼくの存在価値を少しずつそぎ落としていくように感じた。

「ナオタロウくん」

あかり先輩の声が聞こえる。

「あなたなんか、なんの存在価値もないからね」

消えちゃえ♡

＊＊＊＊＊

ひどく寝汗をかいていた。クーラーはついたままだった。

起きると、朝食提供時間の八時をとっくに過ぎていた。それどころか、いまの時間から小田急に乗っても一限の社会学概論に遅刻することは確定だった。

空はどんよりと曇っていた。灰一色の空に、げんなりさせられた。朝起きると、ぼくの腕まで透けていた。明日にでも、ぼくは消えてしまいそうな気がした。ため息を漏らした。

仕方なく、ぼくは二限から出席することにした。

二限の授業は、英語だった。免許合宿に行っていてクラス分けのＴＯＥＩＣを受けていないぼくは、問答無用で一番下のクラスに入れられていた。大学に行ってまで英文法を学んで長文読解をしなければならないのは苦痛だった。

ぎりぎりに教室に入り、息を切らしながら席につく。

ふと、隣の席の女の子のことが目についた。彼女のことは、知っていた。大野美優。席次から、彼女

が日本文学専攻ということだけ知っていた。

ぼくは春学期の授業の時から、みゆのことが気になっていた。綺麗だな、と思っていた。彼女は言葉では言い表せない、一度見たら何度も思い返したくなるような魅力と雰囲気に包まれていた。いわゆる量産型女子大生とは少し違う。

腰まであるような長い髪に、一七〇近くある身長、マスクで顔はわからないけれど、二重に涙袋の大きな目をしていて、スレンダーなボディーラインが美しかった。

けれど、話しかけるほどの勇気もなかった。彼氏がいるかもしれない。そう考えると、途端に自分が傷つくことを恐れて、なにもなかった、みゆの存在なんてなかった、と想いを抑え込んでしまった。

消えるぞ、お前はもうじき、消えるぞ。

……、

人間、それは死への存在である。

大学一年生の夏休みに読もうとして挫折したM・ハイデガーの『存在と時間』。

人間はみんな死んでいく。ぼくらの生きること。八〇億分の一の存在に意味なんてないのかもしれない。けれど、ぼくらはいつか消えていく。最後、のことはぼくにはわからない。誰にもわからない。けれど、最後の直前に残るものは、なんとなく、わかった。

後悔。

どうせぼくは、もうじき消えてしまうんだ。このまま消えてしまうんだ。誰からも、存在価値を認められず、このまま消えていくんだ。

それなら、いっそ、何の偶然かこの隣の席に座った女の子を、つまりみゆをナンパしてみるのもいいかもしれない。彼女に声をかけて、ランチに誘うんだ。で、ゆくゆくデートにでも、と普段なら考えで終わるようなことを、本気で実行しようと考えていた。

長文を解き終わると、指定された英作文を黒板に板書しろ、という課題を出された。その日、たまたまぼくの後ろの名簿の人が二人休んで、ぼくのすぐ後ろにみゆの順番が回ってきた。

黒板にへたくそな文字で英文を書いて席に戻ろうとしたら、タイミングよく彼女が立ち上がって黒板まできた。ぼくはそっ、と「チョークどうぞ」と言って彼女に白のチョークを渡した。一瞬、彼女は驚いたような表情を見せたが、「ありがとう」と満面の笑みを浮かべ、優しくチョークを受け取っていった。安心した。このとき、ぼくの心の内はもう決まっていた。授業が終わったら、彼女に話しかけよう、と。

授業は、ほとんど頭に入ってこなかった。もう、

彼女に声をかけることで頭がいっぱいだった。どんな言葉をかけるのがベターだろう？

授業は十五分早く終わった。続々と教室から人が出ていく。ぼくはわざとゆっくり片付けをして、彼女に話しかけるタイミングをうかがった。

「大野さん、あの……」

ぼくはわざとみゆの名字で呼んだ。彼女は話しかけられて驚いていたが、ぼくを拒絶するようなそぶりは見せなかった。

「どうしたの？」みゆは不思議そうな目でこちらを見た。

「あ、いや、今学期もよろしく。あの、このクラス友達いないからさ」

「え、よろしく！　そっかー、友達はいたほうがいいもんね」

「てかさ、めっちゃスピーキングの発音綺麗だね。留学とかしてたの？」

「えー全然そんなことないよ。ウチそんな普通の公立出身だからさ」

「あ、そうなんだ。あ、そうだ、言い忘れた。あの、文芸メディア専攻の宮島直太朗です」

「宮島くんね、よろしくー」

彼女は終始ニコニコしながら話してくれた。嬉しかった。こんなに女の子と楽しく話せたのは、いつぶりだろう。

二限終わりだから昼食に誘おうかと思ったけれど、やめた。最初から深追いするのはよくないと思った。なにより、彼女に話しかけることができたという事実、ただそれだけでぼくはもう満足していた。

「またね」こう言って彼女に手を振る。彼女のマスク越しの笑顔とその動作がぼくの脳裏に焼き付いていた。

＊＊＊＊＊

それからぼくは、みゆと会うたびに話すようになった。

彼女とぼくは火曜日と金曜日の英語のほかにいくつかの教養科目が一緒で、ぼくの方から彼女の隣に座って話しかけるようになった。みゆは気さくで、よくしゃべった。

ＬＩＮＥは交換したけれど、みゆはあまりＳＮＳが得意じゃないようだった。半日返信がないのは当たり前で、三日後に返信されることもあった。最初は、ぼくに興味がないのではないか、と思った。けれど、彼女は少し変わったところがあった。

例えば、成人式には出ないし、振袖も着ない、前撮りもしない、と彼女は言っていた。ほかに、彼女はインスタもツイッターもやっていなかった。ＳＮＳがすべて苦手なのだと言っていた。彼女は荒川区

に住んでいて、週末には決まった友達と遊ぶのだと言っていた。ぼくは彼女を綺麗だと褒めたが、彼女は照れて何度も「そんなことないよ」と言うのだった。

「ウチ、全然女の子っぽくないよ。部屋も汚いし、そんなお化粧とかするほうじゃないし、平気で下ネタとかも言うし……」

そんな特性も含めて、ぼくはみゆのすべてを気に入っていた。というか、彼女の流行にとらわれない、ふわふわした不思議な雰囲気が好きだった。彼女といると、いつも現実と夢の間にいるような恍惚を覚えた。いつもは女の子と話すことにおびえているぼくも、彼女には落ち着いて話すことができた。楽しかった。

ぼくは意識せずに、みゆ、と呼んでいた。すると彼女もぼくのことを、なおくん、と呼んでくれた。あだ名で呼んでくれる女の子に会うなんて、いつぶりだろう？

金曜日の二限終わり、ぼくは毎週のように彼女をランチに誘った。彼女は快諾してくれた。だいたい、学食に行くか、駅前のファミレスのどちらかだった。普段彼女は昼食をとらないと言っていた。実際彼女は小食で、ぼくが大盛りのカツカレーを食べている横で、ミニうどんを食べるようなことがあった。

ぼくが彼女に恋心を抱くのに、時間はかからなかった。彼女のすべてが好きだった。

「そういえば、なおくんはどうして指先が透けているの？」

出会って最初のランチのとき、彼女はこんなことを言った。

「もうじき消えるから、かな」

「消えるの？」

「たぶん」

「え、大丈夫？」

「どうなんだろう」

ぼくは黙った。

「でも、いつか消えるとしても、ぼくは今が楽しいよ。みゆさんと今こうしてランチに来れたし。すごい嬉しいよ」

「ほんと？」

「うん、すごく」

みゆは少し照れたようにして笑った。

灰色一色のぼくの学生生活に、新しい色彩がさした。

けれど、毎度毎度、ぼくは新しい女子と関わるたびに、同じ悩みを抱える瞬間が、必ず訪れた。あかり先輩のときも、その前も。

みゆに、彼氏がいるのかどうか、ということは、

ずっと考え続けた。略奪愛、なんてそんなことができるはずもない。いるかどうか。恋心を抱いた人間の宿命として、いつか知らないといけないことだった。そして、それを知るまでの時間、いると知った瞬間の苦痛は、耐えがたいものだった。

サークルで落語研究会に入っているぼくは、皮肉のつもりで『どうで彼氏がいるんでしょう？』という新作落語を作った。不思議な魔法で女子の彼氏の有無がわかる、というでたらめな噺だった。

中学から落語を始めて七年になるけれど、このネタを掛けたときほど滑ったことはなかった。自己満足な高座は、結局ウケない。それでも、この題名にあることが、ぼくの主題の一つだった。

＊＊＊＊＊

彼女と出会って、一か月と半分が経過した。十一月十四日、ぼくの誕生日だ。そしてなんて皮肉なことに、あかり先輩の彼氏（Sという）の誕生日は、十三日。ぼくはもどかしくって、はがゆくって、仕方がなかった。最愛の人に、誕生日を祝ってもらえる幸せ。どうせ、彼氏は、あかり先輩を好き放題するのだろう。

十三日と十四日の日付変更線を超えた。ぼくは、二十歳になった。

寮のエントランスに降りていく。すると、カビゴン渡部が簿記の勉強をしているところだった。ポケモンのカビゴンみたいに昼寝ばかりしているうえ、目が細いから、ぼくはカビゴンと呼んでいた。ぼくの、大学寮でのほとんど唯一の友達だった。

カビゴンは、誕生日おめでとう、と言って、酒おごるぞ、と言った。そして、寮の隣のコンビニで、ストゼロをおごってくれた。

部屋に戻ると、水でも飲むかのようにぐいぐい飲み進めた。こういう飲み方はよくないと、いろんな人の話から聞いていた。急性アル中になるかもしれない。でも、そんなのどうでもよかった。なんで大人は酒を飲むのだろう。ぼくはこの日、その理由をすぐに思い知ることになった。

一気に酔いが回った。そうれみろ。ぼくは苦しくなって、寝そべる。

音楽をかけ始める。あかり先輩の好きな、back number。最悪だ。本当に、歌の通りになっちまった。気分転換。大好きなオフコースを流し始める。『ENDLESS NIGHTS』が流れ始める。小田和正の澄んだ歌声が聞こえる……、

Endless nights　Where hearts can hides ……

＊＊＊＊＊

二日酔いのまま、ぼくは誕生日の授業に向かう。

金曜日だった。みゆに会う日だった。顔色の悪いまま、彼女に会いたくなかった。
授業の始まる三分前、みゆは教室に入ってきた。彼女はぼくの隣に座った。
「なおくん」
「ん？」
「これ」
彼女は、ぼくに包装されたカードをくれた。
「誕生日おめでとう。これ、図書カードだけど、使って」
「いいの？」
「うん」
「あ、ありがとう」
晴天の霹靂だった。
「よく、ぼくの誕生日知ってたね」
「ＬＩＮＥに通知来てたよ」
「わざわざ、ありがとう」
「いえいえ～」
ぼくは、嬉しさで泣き出しそうになった。冗談抜きに、嬉しかった。誰かに祝ってもらえることのありがたみを、ぼくは授業中ずっとかみしめていた。
授業が終わるといつものように食堂に向かい、一緒にランチを楽しんだ。
「なおくんって、落語研究会入ってるって言ったよね？」
「あ、うん、一応」
「落語っていつ公演してるの？」
「ぼくが？　プロが？」
「どっちも」
「一応、プロは毎日やってるよ。寄席ってところで」
「えー、そうなんだ」
「よければ、一緒に見に行かない？」
「ん」
「あ、いや、嫌だったら全然」
「いいよ。今度行こう」
ぼくは、これ以上、嬉しい誕生日プレゼントを知らない。

＊＊＊＊＊＊

十一月の二十三日の香盤は随分と豪華な顔ぶれだった。
若手の人気者である春風亭一之輔。爆笑新作派の柳家小ゑん。落語協会の元会長の鈴々舎馬風。一之輔の師匠に当たる一朝が中トリ。中入りの後は人間国宝候補ともされる五街道雲助師匠。
そして、トリは爆笑古典派の桃月庵白酒だった。独演会となればチケットが取れないレベルの人気者がずらりと並んだ顔ぶれだった。
もちろん、ある程度、面白い演者の出る日を狙っ

ていた。

寄席の公演は十日ごとに入れ替わるのだが、つまらない師匠しか出ない時や、あまり初心者向けでない演者ばかりの時もよくある。一之輔や白酒といった師匠方は地方公演でも三〇〇席を満席にするほどの人気者だから、間違いなかった。

当日は浅草の雷門前でみゆと待ち合わせした。ひどい雨だった。朱塗りの門のあちこちに滝ができている。自慢の提灯も畳んである。今日は浅草寺をお参りする着物姿のカップルもほとんどなかった。それがかえって落ち着いた。シャッターの降りた中店通りはひんやりとした雰囲気に包まれていた。観光客が少ないのは、コロナのせいなのかこの雨のせいなのかわからなかった。

三十分も早く来てしまったせいで、しばらくみゆのことを待つことになった。ひどく緊張していた。半透明な指先が小刻みに震えた。

もう、あなたとデートなんかしたくない、と言われたらどうしよう。いや、直接言われなくても、このデートをきっかけに関係を拒絶されたら、ぼくはどうすればいいんだろう。最悪の考えが頭をよぎって、とても悲しい気持ちになる。今まで味わってきた悲しい思い出が一気に胸に込み上げてきて、思わず透明な拳を握る。

時間があったので、近くの薬局でお茶を二本買う。寄席の公演は四時間あるので、流石に喉が渇く。寄席の売店で買えば薬局で買う倍もかかる。特売されていた伊右衛門を二本買うと、待ち合わせ場所に戻って何度もスマホの液晶を眺めた。

「ついたよ～」とみゆからＬＩＮＥ。

キョロキョロ見回してみると、傘を差したみゆがいた。彼女もぼくを探しているようだった。

「みゆ」

「あ、なおくん！　おはよう」

彼女は手を振った。ぼくはどう返せばいいか分からず、マスク越しにぎごちなく微笑んだ。

「すごい雨だね」

「ねー。私って雨女なんだ。ほら、遠足とか運動会とか、いっつも雨降るんだ」

そんなことを話しながら、寄席に向かった。十三時集合にしたから、公演はもう始まっていた。寄席は十一時四〇分から始まる。

チケットを買う。出すよ、と言って奢った。彼女は「いいよ」と申し訳なさそうにしていたけれど、ぼくが出した。パンフレットを受け取って中に入る。

祝日のせいか、そこそこの盛況ぶりではあったけれど、まだ若干の空きがあった。前から四列目の左の方に、二人並んで座れる席が空いていた。ぼくと

みゆはそこに座った。
　みゆにお茶を渡すと「えっ、いいの？」という顔をされた。このくらいは別に。「ありがとう」と言って彼女は受け取った。
　ちょうど春風亭一之輔が出てきた。
　この日の演目は「噺家の夢」だった。一人だけ物価の安すぎる世界に舞い込んだ噺家が大富豪になる夢を見る古典落語だ。
　客は、桁違いに笑った。もちろん、ぼくもみゆも。みゆが笑うのをみて、ぼくはホッとした。落語に興味を持ってもらえるか、とても不安だった。けれど、案ずることはなかった。今日の演者の顔ぶれなら、よほどの人間でない限り落語を面白いと思うだろう。
　時間を忘れてぼくとみゆは笑い、寄席を楽しんだ。
　何より、ぼくは隣にみゆがいてくれることが、本当に嬉しかった。彼女の手を握ることができたなら、と思って、みゆの水晶のような手を眺める。ちょっと冷たそうで、でも温かそうな彼女のつるんと滑らかな手を。
　四時間近くの公演のはずなのに、まばたきするかのように時間は過ぎ去った。気がつけば、トリの白酒師匠。ネタは「壺算」だった。頭のいい男がイカサマをして壺を安く買おうとする演目で、難しいネタだった。下手な演者がやると、壺のイカサマの説明の方に気を取られ、途端に面白くなくなる。しかし、そこはさすが若手きっての爆笑派、さらりと説明を流して、三人いる主要人物をユーモアたっぷりに演じてくれた。おかげで、何も考えず、ぼうっと最後の三十分を楽しむことができた。
　暖かい空気と共に、緞帳が下がり、追い出し太鼓の「デテケデテケ」という音が鳴る。満たされた気持ちで、寄席を出た。
　幾分か小雨になったとはいえ、まだ降っていた。傘がぶつからないようにしながら雷門の方に向かって歩く。彼女はトリの白酒が一番面白かった。それから、柳朝の「鹿政談」もよかったと言った。
　ぼくは楽しそうに感想を言う彼女を見て、よかったと思った。寄席デートというアブノーマル極まりないプランに自信が持てなかった。
　でもとにかく、みゆを喜ばせたかった。不器用でもいい。ぼくが知っている一番楽しい場所に、みゆを連れて行ってあげたかった。彼女が楽しいと言ってくれるなら、お金なんていくらでも払った。
「ねぇ、どっかでご飯食べて行かない？」
「いいよ。そのつもりだった」
「どっか知ってる？」
「そうだな。一件知ってる！」
　雷門を右に曲がって、隅田川と逆の方向に歩いた。

しばらくすると、美術商の隣に「モンブラン」という店の看板が見えてきた。
「ここ、とっても美味しいんだ」
「へぇ、初めて来た！」
ぼくは「ミヤジマ」と名前を書いて並んだ。雨だけれど、三組ほど並んでいた。十五分ほどして中に案内された。「モンブラン」は洋食屋として有名で、殊にハンバーグが美味しかった。前に何度か来たことがある。だから、味は間違いないはずだ。
みゆは目をキラキラさせながら、「和風にしよっかなー」と言った。ぼくはロシア風にした。お互いにセットにして、ライスをつけることにした。
店内には有名人のサインが沢山貼られている。レトロな喫茶店のような雰囲気もよかった。「いっぱいあるねー」と彼女は莞爾と笑った。
しばらくして、湯気の立ち昇るハンバーグが運ばれてきた。香ばしくて、ほんのり甘いソースの匂いがする。
「美味しそう～」
「絶対ここのは美味しいから」
みゆは丁寧に切り分け、まだ湯気の立っているハンバーグを満面の表情で頬張った。
「美味しい」
「でしょ。ここ、おすすめなんだ」
「うん。確かにここ、すごいいい」
みゆとぼくは会話を楽しみながら、ハンバーグを平らげた。
彼女はお手洗いに行くと言ったので、その間に会計を済ませておいた。
彼女が席に戻ってくると、ぼくは「もう会計済ませてあるから」と言った。彼女は戸惑っていた。
「そんな。悪いよ。ウチも払うよ」
「いや、いいよ」
「だめ。じゃあ、うちにいくらなら払わせてくれる？」
「……」
「お願い」
仕方なくぼくは、千円だけみゆから貰うことにした。
そしてぼくは、銀座線で帰るという彼女を駅まで送って行った。
「ありがとう、なおくん」と彼女は微笑んだ。「とっても楽しかった。なおくんと来れてよかった」
「ほんと？」
「また遊びに行こうね」
「そうね」
ばいばい、と彼女は手を振って、そのまま駅の改札を潜った。手を振り返して、彼女が見えなくなるまで改札の外から見つめていた。

＊＊＊＊＊

寮に戻ると、エントランスでカビゴンが簿記の問題を解いていた。彼はぼくに気がつくなり、「どうだった～？」と間延びする声で聞いてきた。

こう言う時、顔に出てしまうぼくは、思わず、気持ち悪くてにやけてしまった。それを見てカビゴンはフッ、と鼻で笑って、「よかったやん」と言った。

「えー、いいなぁ。楽しかったんか」

「とっても」

「キスとかできた？」

「えっ、いやぁ、あ。そんなそんな。一回目だし」

「冗談だよ。お前もおもろいな」

ははは、と戯けた笑いを浮かべてくる。

「ええやん。お前、このまま付き合えるかもよ」

「そう、だといいな」

「え、だって普通にお昼とか食べるんだよな？　一緒に帰ったりもするんやろ？　で彼氏もいないんやろ。もう勝ち確やん。てか、お前が彼氏やん」

「……」

「どしたん？」

「いける、かな？」

「いけよ。てか、もう十二月やろ？　そろそろ人肌恋しくなる季節だなー、あー、おれも彼女欲しいなー、マッチングアプリでもやろうかなー」

透けた掌を見つめる。ほんのり、色素を取り戻しているような気がした。

この手で、彼女の手を握る日が来るだろうか。きっと彼女の手を握る日には、ぼくは透明ではなくなっているだろう。

エントランスから月明かりの眩しい中庭に出た。月光がクリスタルのように輝いていた。中庭に植えられた楓の葉が散り始めていた。

「もうじき、冬だな」カビゴンが呟いた。

＊＊＊＊＊

次の金曜日、ぼくは意を決して、彼女に話を切り出した。

「ねぇ、みゆ」

「どうしたの？」

「あの、十二月ってさ、空いてる？」

「んー、日によるけどどうして？」

「あのさ、一緒にイルミネーション見に行かない？」

「……」

「ダメ？　例えば二十五日とか、さ」

「うーん。いいけど、土日は割とバイトで忙しいかも……あの、平日とかになっちゃうかもしれないけど」

「まじ？　全然いい。いつにしようか」

とグイグイ食い込む。が、彼女は乗り気でないの

かそんなに嬉しそうな表情をしていない。一方で、行かないとも言わないことにちょっと戸惑った。今までは、きっぱりと断られることばかりだったから、みゆのこの曖昧な反応に、少しためらった。けれど、ここで引いてしまってもいけない気がした。今年のクリスマスは、みゆと二人で過ごしたい。

「忙しい、かな？」

「ちょっと考えさせてもらってもいい」とみゆは言った。これ以上押すのも、良くないと思った。ぼくは煮え切らない気持ちだった。

その日のロシア文学史の授業は、ずっとそのことばかり考えていた。女の子とイルミネーション、普通の大学生ならそのくらい造作もないことなのかもしれない。でも、ぼくのように、女の子という女の子から存在そのものを拒絶される変人からすれば、たったこれだけのことでも、本当に勇気のいる、大きなことになる。

変わり者は邪魔者。そんな日本社会で、弱者男性としてのぼくは、周りから見れば、空回りのダメ人間に見えるのかもしれない。けれど、ぼくだって、必死にもがいてる。苦しみに抗いながら生きている。

小田急線に乗って狛江に戻る間、東京じゅうのイルミネーションを調べた。

みゆは普段銀座線で帰っていると聞いていたので、ぼくは表参道のイルミネーションを見に行くのはどうかと思った。それなら彼女も帰りやすいだろうし、大学からも遠すぎない。クリスマスだと人が多いだろうから、前倒ししてもいいかもしれない。

もう、暗いところでひとりぼっちなのは、懲り懲りだ。花火も、イルミネーションも、クリスマスツリーも、いつもぼくは光のあるところに行くこともなく、光の反対側にできた影の中から出ることができずにいる。

「なおくんといると、楽しいよ」って、みゆの言葉。こんなちっぽけなぼくの存在価値は、みゆの中にしかない。

透明な指先を眺める。十二月、ぼくはまだ、消えていなかった。けれど透明なままだだった。

ぼくって、何だろう？

＊＊＊＊＊

二十一日なら空いている、と言われた。水曜日だった。

授業終わり、ぼくはみゆと待ち合わせて表参道へと向かった。渋谷で銀座線に乗り換え、隣の駅で降りた。いつもより、二人とも口数が減っていた。ぼくは必死に話をさぐり、彼女もなるべくいつもを演じようとしていた。けれど、ぼくは彼女との間に、どこか距離感を感じた。

表参道は案の定、きらびやかなイルミネーションに彩られていたけれど、人工ダイヤモンドのように、どこか味気なかった。というより、イルミネーションなんて、最初からどうでもよかった。ぼくはただ、みゆの存在が大切なのであって、上っ面だけの飾りや現実なんて、なくてもいい。たったひとつ、みゆだけが大切な存在なんだ。

表参道から原宿のほうに向かって歩く。似たような景色が続いた。クリスマス前だからなのか、人はまだ少なかった。いつもなら劣等感しか感じさせてくれないこの場所は、今日だけ全く違う場所のように思えた。女の子とイルミネーションを見れている。

言葉が喉元までせりあがって、飲み込んでしまう。その繰り返しだった。たった二文字、それだけなのに、どんな言葉よりも深く、重たいものだった。けれど、それは抱え込むことができないことも、よくわかった。

ぼくは、あかり先輩に告白しなかった後悔を、カッターナイフで刻んだ。けれど、結局、それは今、ぼくの消滅の可能性として病気のようにぼくを蝕んでいる。

原宿の駅で、表参道の方に引き返した。みゆは楽しそうだった。ぼくも、楽しかった。楽しかったけれど、もどかしかった。今にも心臓が飛び出てしまいそうだった。

気が付けば、駅についていた。銀座線の階段を降りようとしたみゆを、ぼくは「待って」と呼び止めた。

「どうしたの？」

「あの、さ」

「……」

「好きだ。付き合って」

「……」

みゆは、少しして「ごめん」と呟いた。

「どうして」

「ごめんね、ウチさ、その、駄目なの。恋愛、できないんだ」

「なぜ……」

ぼくはみゆの手をつかんだ。すると、彼女の掌が雪のようにじわりと溶け始めた。溶けたみゆの一部は、空気中に消えた。

「ごめん。言えなかった。ウチ、誰かに触れられると、消えちゃうんだよね。ごめん、ウチの意思と関係なく、生まれたときからそうなの」

「……」

「だから、ごめんね。でも、これからも友達でいようよ」

「そんな……」

ぼくはみゆを抱きしめた。彼女の体温が伝わるのと同時に、彼女はゆっくりと溶け始めた。
「やめて。だめ」
「ごめん」
「ウチもさ、なおくんのことは好きだよ。その、友達として」
また遊びに行こう、ね？
でもウチがそういう人間なんだって、わかってほしい。
みゆは、ぼくにこう言った。
彼女を見送った後、帰りの小田急で、ぼくはなんとも言えない複雑な感情を抱いていた。絶望、に程近い感情だった。
みゆ以外の女の子は、誰ひとりとして、ぼくの存在価値を認めてくれなかった。ぼくにとって、みゆ以外の存在はありえなかった。
それなのに、みゆには、触れることができない。なぜ彼女は消滅してしまうのだろう？　ぼくにはわからなかった。ただ一つ言えるのは、彼女はいま窓外に見える雪のような存在で、ぼくの目の前に現れて、そして触れればたちどころに元の形を失ってしまうということだった。
彼女が雪のような存在である。
これは単に、比喩として用いるべきにとどまらないことを、愚鈍なぼくでも、さすがにわかった。
雪のような、みゆ。雪のような……、

＊＊＊＊＊

不条理だ。この世のなにもかもが、不条理だ。

＊＊＊＊＊

二年生最後の授業の日に、春休みも会おうね、と言って結局会ったのは三月だった。最後に会ってから一か月半も経過していた。
三年からキャンパスが変わるので、小田急線沿いから千代田線沿線に引っ越した。
引っ越してから二週間ほどして、ぼくはみゆを部屋に招き入れた。その日ぼくらは神保町で古本巡りをして、「さぼうる」でクリームソーダを飲んだ後、湯島まで行って上野動物園に行った。よく晴れた春の日だった。ぼくの家から上野動物園までは歩いていくことができた。
「部屋来ない。ここから近いんだ」と誘った。みゆは「行く！」と言った。ぼくは彼女を連れて、根津の方へ歩いた。
誰かを部屋に入るのは初めてだった。女の子を招き入れる、というのも。
「入っていいよ」
彼女は玄関に足を踏み入れた。一応掃除はしておいたけれど、それでも床に山ほど本を積んでいる自

分が恥ずかしい。
　みゆはベランダの多肉植物を眺めた。雨粒のような葉叢が、アロマキャンドルの明かりのようにシンプルな部屋を色付けしていた。
「ウチさ、植物好きなんだよね」
　そしてみゆは莞爾と笑った。そしてうっとりとハオルチアを見つめていた。水あげていい、とみゆは言った。いいよ、と返す。彼女は霧吹きで水を吹きかけた。水晶の欠片のような水滴が、エメラルド色の葉肉で輝いた。きらりと光る水滴が、植物をのぞき込むみゆの瞳できらきらと星空のように映っていた。
　座りなよ、と言って、みゆはぼくのベッドに腰かけた。ぼくも恐る恐る、ベッドの上に座る。なまの苔のようにふかふかした感触がした。
「綺麗な部屋だね」
「そう？　いやぁ、ぼくは掃除苦手だからさ、なるべくものを増やさないようにしてるんだよね。なんかさ、すぐにものなくしちゃうんだ。てか、本ばっかだよ。笑っちゃうよね」
　みゆの手が、すぐ近くにある。彼女の笑う表情も、そのすべてが、ぼくの近くにある。
「ほかに、女の子を呼んだりするの？」
「いやいや、みゆが初めてだよ」
「そうなんだ」
「だって、信頼できない人を部屋に上げたくないじゃん」
　ぼくはわざと彼女から視線をそらした。彼女の優しい視線は、ぼくへの言葉がイノセンスであることを物語っていた。
　ぼくはみゆの艶やかで丸い彼女の輪郭を追っていた。ぼくの視線が彼女の臀部に達したとき、ぼくははち切れそうな思いがした。
　どうしてこんなに欲しくなるのに、ぼくはみゆとボーダーを超えることができないんだろう。
　みゆが、欲しい。強引に突き進むことは、できるのかもしれない。この空間で、ぼくとみゆを阻害するものはなにもない。
　ぼくの中に棲んでいる悪魔が、彼女を求めている。ぼくは〈女として〉のみゆが欲しかった。
　でも、彼女の涙は、見たくなかった。〈女〉と〈男〉である以前に、ぼくは今の関係を失いたくなかった。それに、みゆに触れたら、彼女は消えてしまう。消えてしまう、というのはどういうことだろう。二度と会えなくなるということだろうか。ぼくがいま一番恐れているのは、彼女を失うことだった。
　みゆは、〈友達〉だろうか？
　ぼくは大好きだ、みゆのことが大好きだ！

　でも、これ以上先に進むことができなかった。それはぼくにもよくわかっていた。恋人でもないし、肉体でも繋がっていない。この曖昧な関係が、もどかしい。ぼくはずっと、もっと深いところでみゆと一緒にいたかった。

「みゆ」

　ぼくはみゆに後ろから抱き着いた。彼女の乾いた匂いがした。夕焼けに空が染まるみたいに、彼女の体温が伝わってくる。彼女は驚いてびくっとした。彼女は、氷のように、少しずつ溶け始めた。

「どうしたの？」

　みゆは動作を止めて、優しい目つきでこちらを見た。彼女は拒絶するでもなく、かといって受け入れる様子もなかった。

「やっぱ、ぼくは好きだよ。みゆのこと」

「ダメだよ、なおくん。ウチ、消えちゃう……」

「どうして……」

「ごめん。ウチさ、ほんとに、ダメなの。なおくんだからじゃなくて、ほんとに」

「キスもしちゃ、だめ？」

「だめ」

　届かない。ぼくの想いが、星に向かって願い続けるように届かない。ただ、生温かい感情だけが、胸の奥できらり輝き続けている。彼女は「離れて」と言いながら、なだめるようにぼくの頭を撫でた。彼女の優しい手つきに振りほどかれるようにして、ぼくは離れた。

「ねぇ、ウチなんかよりも、もっと素敵な人、きっといるよ。だって、信じられないもん。なんでなおくんみたいに優しい人に彼女ができないんだろうって」

「みゆだって、なんで、ほんとに、男の子と手を繋いだことも、ないの？」

「うん。だってさ、ウチ、そういうのじゃないからさ。でも、だからってどうとも思わないよ。ねぇなおくん、ウチはほんとに信頼してるよ」

「ごめん」

「謝ることじゃないよ。嬉しいよ。嬉しいけど、ごめんね」

「いいや」

「ウチは誰とも付き合ったりしないから、安心して。」

「みゆ……」

　生ぬるい現実に突き飛ばされて、またベッドに座り込んだ。みゆも、ぼくの隣に座る。

「ねぇ、なおくん。そんな悲しそうな顔しないで。ウチさ、ほんとに幸せだよ。なおくんみたいな優しい人と友達になれたこと」

「みゆは、ぼくのこと、嫌いにならないの？」

「嫌い？　そんな。嫌いだなんて」
「じゃあ、どうして……」
「わかるよ。なおくんの気持ち、わかるよ。でも……」
ははっ、と笑って、ベッドにだらんと寝そべる。
みゆも笑って、ぼくの隣に寝そべる。
「みゆ」
「ん？」
「また、ぼくと遊んでくれる？」
「もちろん」
友達だもん、とみゆは言った。ぼくはそのまま、天井を見つめながら、ぼうっと蒲団の柔らかさを味わった。ぼくは何も言わず、ただただぼんやりと彼女のいる空間で、嬉しさとも悲しさともつかない感情の中に埋もれていた。
外はそろそろ夕暮れだった。

＊＊＊＊＊

なんで、みゆにあんなことをしたんだろう？
もう、だめだ。ぼくは、なんて馬鹿なやつなんだ。
みゆだけが、ぼくの存在価値を認めてくれた。彼女だけが、世界でたったひとり、ぼくに優しかった。
その彼女を、ぼくは裏切った。
なんでみゆに抱き着くようなことをしたのだろう。彼女に触れれば、消えてしまうというのに。
最低、と自分で繰り返す。そして、このままぼくは消えてしまう気がした。みゆはぼくのことを責めるだろう。そしてぼくは、後悔したまま消えるのだろう。最低だ、本当に最低だ。たった一つの、小さな優しささえ、ぼくは掬うことができずに、掌からこぼしてしまう。
ところが、ぼくはいつまでも消えなかった。四月、五月……。春休みが終って、三年生になった。
相変わらず、友達もなく、教授からは煙たがられ、サークルにもいかず、もちろん女の子との交流もなかった。書類上の数字が一つ増えただけだった。世界はぼくと無関係に時を進める。
みゆとは巡り合わせが悪いのか、授業は被らず、何の連絡もなく、会うこともなかった。嫌われた、と思い込んでいた。それでもぼくは、消えていなかった。
ぼくには何の存在価値もないはず、だった。
ところが、指先や腕は透明になることもなく、ぼくの肉体は生まれたままの姿でいた。
なぜだろう、と考えてみたけれど、わからなかった。
そんなふうに過ごした六月の最初の日だった。みゆから、ＬＩＮＥが来ていた。
「お久ぶり～。元気？」

思わず目を疑った。
「元気だよ」と即レスする。
「あのさー、見に行きたい映画があるんだけど、どうですか？」
「行きたい！」
「好みに合うかわからないけどいい？」
「全然、何でも見るよ」
みゆ『ＲＲＲ』という映画のＨＰのリンクが送られてきた。インド映画らしかった。少し調べてみると、最近話題の映画のようだった。
「いつがいいですか？」
「いつでも大丈夫！」
「了解～。池袋と新宿で上映してるらしいんだけど、どっちがいいかな？」
「みゆの行きやすいほうでいいよ」
「じゃあ、池袋で十四時半からのにしよっか」
「わかった！」
スタンプを送る。「よし」と、ぼくは快哉を叫んだ。みゆにまた会えることを、心の底から喜んでいた。

＊＊＊＊＊

当日は池袋で十一時半に会うことになった。一緒にランチしてから、西武の百貨店にある映画館に見に行こうということになった。
当日はいけふくろう前で待ち合わせた。池袋なんかめったに来ないから、待ち合わせで迷って、みゆを待たせることになってしまった。
「ごめん、お待たせ」
「ううん、全然だよ」
西部池袋本店の七階のイタリアンでランチを済ませ、十四時半に始まる映画を見に行った。
三時間という長い映画だった。一九二〇年代、イギリス統治下のインドを舞台に、ビームとラーマという二人が、イギリス領インド帝国に戦いを挑むというアクション映画だった。インド映画を見るのは初めてだった。
ぼくは隣にみゆがいることも忘れるくらい映画に熱中した。彼女も夢中になって見てた。三時間はあっという間に終わった。ぼくらは生ぬるい余韻に浸りながら、映画館を出た。
「面白かったね」
「ね、面白かった」
「もしよければ、ご飯食べてから帰らない？」
西部百貨店を出るときには、一八時を過ぎていた。ぼくは「いいよ」と言って、南口の少し外れにあるファミレスに入った。みゆはコーンピザを、ぼくはおろしハンバーグを食べた。一日はあっという間に過ぎていった。
丸の内線に乗っていけば安く帰れたのだけれど、

みゆと一緒に帰りたくて、山手線で西日暮里まで向かうことにした。
「ねえ。夏休みもまた、会おうよ」
駅のホームで、次の約束をした。
「いいよ」
「会ってくれるよね」
「そりゃ、もちろん」
「みゆ」
「なに？」
「写真、撮ってなかったね」
「あー、そういえば」
ぼくはここで撮ろうと言った。みゆは苦笑いしたが、いいよ、と言った。
カメラを自撮りにすると、彼女はピースした。ぼくは二枚写真を撮った。
「あとで送るね」と言った。
山手線が来た。席は空いていて、並んで座ることができた。電車は動き出した。
みゆの肉体は、すぐ横にあった。ぼくは彼女の存在を、強く感じた。髪からの甘い匂いがするたびに、なにものにも代えがたい特別な意識を抱く。
ぼくは黙っていた。みゆも黙っていた。何て声をかければいいのかわからなかった。
山手線はやがて西日暮里に到着した。ぼくはここで降りなければならなかった。もう少し、彼女と一緒にいたかった。なんなら、上野で降りて、湯島から根津を経由してもいいのだ。けれどみゆは、「なおくん、降りないの？」と不思議がった。
もう少しだけ、と言えなかった。
ぼくは立ち上がる。そして、「またね」と言った。
みゆは「ばいばい」と言った。
ぼくは電車を降りて、立ち止まって後ろを振り向いた。ドアが閉まる。山手線は走り出した。そして、急に、ぼくの胸の内に、さみしさがこみあげてきた。

＊＊＊＊＊

夏休み中、みゆからＬＩＮＥの返信はなかった。
ぼくはずっと、彼女からの返信を待ち続けた。スマホから目を離して、ふとまた液晶に目をやると、彼女から返信があるんじゃないかと思って、何かを期待して、いつも期待に裏切られた。みゆはいつも返信が遅かったけれど、一か月も返信をくれないことは、今までになかった。
夏休みも半ばにさしかかったある日、ぼくは指先がまた半透明になっていることに気が付いた。
九月、大学三回目の秋がやってきた。ぼくはみゆのことを探していた。キャンパスのどこかに彼女がいるんじゃないか。そうして、いつも出口のない迷宮をさまよっているような、途方に暮れた気持でい

た。

みゆに声をかけてから、もうじき一年が経過しようとしていた。

その日は、バイト終わり、ゼミの資料を仕上げるために、夕方にキャンパスに向かった。九月も終わりかけていたが、提灯の灯が燃えるように、駅前から見える神田川の川べりに、彼岸花の群生が咲いていた。夕日のぼんやりとした中に、彼岸花は輝いていて、夏と秋の境界をあいまいにしていた。

駅に向かう人の流れに逆らいながら、キャンパスに向かう。こんな時間に通学するのは初めてだった。ちょうど五限がはじまった時間で、人はまばらだった。エントランスで、授業終わりらしい生徒が群れていた。

図書館に入る。図書館は地下三階まで伸びている。ぼくの目当ての本は、地下二階にあるK文庫の棚だった。階段を下ると、地下二階の本棚に、見慣れた人影を見つけた。

「みゆ！」

ぼくは足早に階段を降りて、彼女に近寄った。

「久しぶりだね」

みゆは黙って、ぼくから視線を逸らした。そして、彼女はその場から離れようとした。

「待ってよ、こっち見てよ」

ぼくは彼女に手を伸ばした。ふと、ぼくが触れたら、彼女は消えてしまう、ということを思い出した。

しかしぼくは、彼女に手を伸ばして、後ろから抱きつこうとした。消えてほしくない。このまま手を伸ばさなければどちらにしろ、みゆはぼくの前から消えてしまう……。

「やめて、離して！」

後ろから抱きつくと、彼女は激しく拒絶して、ぼくを払いのけようとした。ぼくは抵抗した。

すると、ぼくの体から無数の光が発せられ、綿ぼこりのよう泡立って肉体が溶け始めた。半透明だった肉体の色素がみるみるうちに薄れ、粒子が粗くなっていく。手のひら越しに、みゆが見える。彼女は泣いていた。ぼくの体がどんどん薄くなっていく。

光はゆっくりと、体から流れ出し、やがて空気と肉体が交じり始めた。

消えるのは、ぼくの方だった。

（了）

「白昼夢」

宇多津　香穂

■受賞のコメント■

この度、私の作品を明治大学文学賞・倉橋由美子文芸賞の佳作に選出していただき嬉しく思います。またこのような機会を与えてくださった明治大学連合父母会、株式会社阿久悠および関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

今回書かせていただいた『白昼夢』は、リクルートスーツで汗だくになりながら都内を彷徨っていた際に浮かんだ「長野行きたい」という短絡的な考えから生まれました。長野は旅行で訪れる程度で私自身は田舎に帰るという経験が無いです。そのため、夏休みに田舎の親戚の家に住むっていいなぁという憧れを主人公に託しました。

登場する兄弟は絵本『ふたりはともだち』のがまくんとかえるくんをイメージし、なかでも「ひとりきり」という話から着想を得ました。かえるくんのようにふとした時に「なんでなにもかもがすばらしいんだろう」と思える心の余裕をもって生活したいものです。

未熟な点ばかりですが、作品として人に読んでいただける形になったのは周りの人の支えのおかげです。感謝の気持ちを忘れずこれからも精進して参ります。ありがとうございました。

白昼夢

車内は暗く、真夏であることを忘れるほどに寒かった。炎天下を歩くうちにかいた汗のせいかもしれない。薄いTシャツからのびた腕にはぼつぼつと鳥肌が立っていた。周りの乗客を一瞥してみたが、澄ました顔でスマホに目線を落としているだけだった。

東京の夏より過酷なものはそうそう無いんじゃないかと思う。まず外は暑すぎてたった一時間も歩けない。かといって屋内、特に電車や商業施設はシベリアのラーゲリかと思うほど寒い。ガタゴトゴトンと巨大な虫が地下を這う音が頭の内側を震わせる。ゆらゆらと揺れるキャリーケースを片手で抑え、目を瞑り、冬の日のコーンポタージュを思い浮かべた。鍋つかみを嵌めた両手に収まった器からは白い湯気がたっている。しかし指先は相変わらず冷えていた。僕は縮こまって、冷たい箱から飛び出してぬるっとした生温かさに抱擁されることを夢見た。

空調が苦手だ。実際、今僕が肺を患っているのはうちの変な匂いのするエアコンが原因だと思う。幼少からの喘息がとうとう悪化したのだ。

母と僕は都内の最寄り駅から十五分歩いた先のマンションで暮らしている。彼女は僕の咳に構うことなく四六時中エアコンをつけた。というのも母は「窓を開ける」という行為をしない人種だった。開けようと試みても桟に溜まった埃やら虫の死骸やらのせいか、はたまた劣化で滑りが悪いのか、開けるのには相当の力を要することしか分からなかった。挙句、日光さえも拒み、年中分厚い遮光カーテンを下ろしている。彼女がメニエールを患ってからもそれは変わらない。だから家と言われると、蛍光灯の白さとかカビやヤニが染みついた空気を連想する。あと、かえるのニットキーホルダー。母がお守りに作ってくれたものだ。十年以上鍵についているから茶色く変色してしまった。

地下鉄を乗り継ぎ東京駅に出て新幹線に乗り込んだ。改札付近は人でごった返していたものの、車内は驚くほど快適だった。不思議なほどに揺れないし、鉄塊が空気を切り裂く音はすぐ耳に馴染んだ。

「お食事、お飲み物いかがでしょうか」

よく通る声が後ろから聞こえた。客室乗務員がワゴンをガラガラと押していた。僕はその女性に向かって「すみません、温かいコーヒーをお願いします。レギュラーで」と言った。彼女は微笑みながら「少々お待ちくださいませ」と言って手際よく用意を始めていた。

右ポケットに手を突っ込むとジャラジャラと小銭のぶつかる音がした。彼女は小さなテーブルに置かれたそれを確かめて微笑み、「ごゆっくりどうぞ」とコーヒーを置いた。両の手に伝う温もりと白い湯気はまさに僕が先ほど欲していたものだった。濃い黄色ではないという一点を除いて、頭の中のポタージュはコーヒーという実体になったのだ。だが口に含むと泥みたいな味が広がった。もうそれを口にする気は起きなかった。

僕は小銭の入っていない方のポケットに手を突っ込んで鍵の凹凸を指先でまさぐった。いつも右ポケットに煙草と少しばかりの小銭、左に鍵を入れていた。

ほんの短いような、あるいは長い微睡みから目覚めると、車窓の風景はがらりと変わっていた。コントラストの低かった世界はすっかり色づき、鮮やかな青と緑が延々と流れている。上半分の青と下半分の緑はどこまでも続き、世界を表すには二色の絵具で十分だと期待させた。

同時に、窓枠に囲まれた景色はマイブリッジの連続写真映像を想起させた。それはこの巨大な容れ物があまりに速すぎるからかもしれなかったし、あるいは太陽に向かう青い稲の眩しさを分厚いガラス越しに見ているからかもしれなかった。

新幹線を降り、バスに十分ほど揺られてようやく待ち合わせ場所にたどり着いた。人の放つ汗と下水の混じった悪臭が夏草の匂いに、耳を劈く喧騒は蝉しぐれになっていた。

目の前にはスキー愛好家の間で有名なゲレンデが静かにその存在感を主張していた。生い茂る森の部分と草木の無い荒涼とした部分とがくっきりと分かれており、自然とは呼べない有様だった。山自身も悠長に構えているようで、自身の姿の滑稽さを恥じているようにも見える。それは車窓から見ていた風景とは違って僕を不安に駆らせ、悲しませる何かがあった。無意識的に煙草を咥え、火を点けていた。

その山で生きている生き物や風や川のことを考えた。静かな白に覆われて沢山の生命が眠りにつく時、山は歌い踊ることを余儀なくされる。そして瑞々しい風や自由に踊る川、動物や虫が各々の音楽に耽る時、山は己の醜さゆえに、ただじっと辛抱するのだろう。夏のゲレンデの山は丸まって眠る老人を彷彿とさせた。

「おーい！」

振り返ると、母の妹である叔母がちょうど車から

降りているところだった。叔母はドアを勢いよく閉めた。
「こんにちは、お久しぶりです叔母さん」と僕は言った。
「ここまで来るの大変だったでしょう。本当、来てくれてありがとう」と屈託のない笑顔で言って、僕と握手をし、両肩に手をかけて軽くゆすった。僕は昨夜見た海外映画を思い出しながら、なるべく爽やかな笑みを浮かべて「とんでもないです、楽しかったですし」と正直に言った。
「でもくたびれた顔してるわ。さ、荷物は後ろにのっけて、前に座って」
僕は彼女の言う通り車に乗り込んだ。

叔母は慣れた手つきでハンドルをとり、鼻歌を歌っていた。ビーチ・ボーイズの歌だった。四方の開いた窓から車内に絶え間なく新しい風が入り、そして彼女の鼻歌を孕んでまたどこかへ流れていった。
「それにしても見ない間に随分大きくなったわね」
「まあ、そうでしょうね、見てくれだけですが。僕が最後に叔母さんに会ったのは十三年も前ですから」
「叔母さんじゃなくって早智子さんって呼んでよ。お客にもそう呼ばれているの。と言っても夏は閑散期だから、避暑とか何かの療養に来る人ばっかりだけどね。入ってもぼちぼちよ。ああそう、肺の調子は大丈夫なの？」
「ええ。そんなにひどくはありません」
「ここは空気がおいしいでしょう。肺にもいいはずよ。ええ、東京にいるよりずっとよくなるに決まってるわ。でも時間がゆったりと流れているから気を付けてね。夏休みなんてあっという間よ」
早智子さんの柔らかな声は風に溶けて消えた。風は彼女の短く揃えられた髪や滑らかな頬を撫ぜた。彼女は母に似た端正な顔立ちだが、加えて母の持ち合わせないエネルギーのような何かが内側から溢れているようだ。それは大きく膨らんだ彼女の腹がそう感じさせるのかもしれなかった。しかしアンバランスに細長い手足のせいで、その腹は僕に映画で見た人間に寄生する蟲を想起させた。
娘時代の短すぎた僕の母と違って、早智子さんは三十五で妊娠をしている。しかし今回が初めての妊娠ではない。だからこそ彼女は無理できないのだ。そんな折に僕が肺炎を患っていると耳に挟んだのだろう。彼女はあくまで療養という名目で僕を招待した。義絶していた母に頼んでまでだ。

馬鹿みたいに広く真っ直ぐだった道路は山に入っ

た途端に狭く曲がりくねっていった。お伽話に出てくる城のようなホテルを右手に脇道に入ると、さらに道は狭く、舗装されていなかった。高い木々は地上への光を遮り、葉の揺れるざわめきが僕らを囲んだ。そんな道をずっと進むと、夫妻の営むロッジがひっそりと佇んでいた。早智子さんは入り口から「入ってちょうだい」と言って、キャリーケースを担ぐ僕を招いた。

「トイレは一階二階どっちを使ってもいいわ。お風呂は二階の階段あがってまっすぐ行った突き当たり。露天風呂もあるのよ。四時から十二時に入ってね。今日はお客いないからお湯ためないけど。あ、そういえばお酒は飲むのかしら。間違っても泥酔して女湯に入るなんてことないように。部屋は、お客には基本二階の客室を使うから、あなたの部屋は一階ね。狭くて客室向きの部屋じゃないんだけど、それは我慢してちょうだい。今朝旦那が掃除してたからある程度片付いてると思うし、あとは自由に使ってくれて構わないわよ。お夕飯は七時頃にしようかしら。それぐらいに呼ぶわ」

早智子さんは口早に説明しながらフロントの壁に下げられた幾つかの鍵を手でいじった。鍵同士がジャラジャラと鳴った。そしてその一つを手に取って「はい、部屋の鍵」と僕に差し出した。渡された鍵にはプラスチック製のルームキーがついており『ロッジヒナギク　103』と書かれていた。

「そうそう、この部屋は幸平くんがたまに使ってたのよ。連絡もなしにふらっと来て」

彼女は何の気なしに言ったから、僕はそのまま聞き逃しそうだった。そして耳を疑った。念を押すように「兄がですか？」と聞いてみると、彼女は「ええ、知らなかったの？」と不思議そうに言った。そんなこと今までに一度も聞いたことがなかったから、僕は静かに頷いた。もし母がここにいたらきっと僕と同じ反応をしただろう。

その部屋は確かに手狭だが机もベッドもあり、薄いカーテンからは光が差し、何よりエアコンがなかった。代わりに扇風機が一台隅に追いやられていた。だいぶ年季が入っているように見える。僕はキャリーケースの衣類をクローゼットにいれて荷物を整理した。するとどうやら机の引き出しが閉まっているらしいことが分かった。

片付け終わると埃っぽい匂いが鼻をつき、僕は窓の鍵を外した。桟や網戸は汚れていたもののそれは何の問題もなく開き、涼しく瑞々しい風が部屋いっぱいに注がれた。風が木々の葉をくすぐる音がすぐ

そこに感じられ、蝉の声が少し遠くに聞こえた。
　煙草に火を点けて煙が登っていくのを眺めた。煙は自由気ままに僕の周りを漂い、やがて上へ向かって消えていく。しばらく窓に向かって目を瞑り、心地よく流れていく空気を感じた。そして淡い水色や黄緑色のことを考えた。安っぽく透き通るセロファンではないが、ただ形容しがたい色だ。笑われるだろうがサイゼリヤのムール貝の内側が一番近いと思った。
　僕はベッドに身を預けた。シーツに染み込んだ日向の匂いに包まれながら、ずっと握っていたルームキーに目を移した。よく見ると角は削れていたし、細かい擦り傷がたくさん入ってくすんでいるようだ。それは母が眺めていたガラス製のジュエリーボックスのようだった。

　こうした時間を過ごしたのだろうか、という懐疑の念が浮かんでは萎んだ。長身で母譲りの癖毛と歯並びが悪いことを気にしていた。僕と兄はたった二つしか離れていない。幼い頃はよく遊び、学校に入ると僕に勉強を教えてくれた。そして小説家や画家やバンドなんかを慕い、気に入ったのがあるとすぐに「とびきり最高なんだ。お前も絶対気に入るぜ」と僕にその作品の良さを夢中で語った。友達の少なかった僕にとって、狭い世界から外へ連れ出してくれた兄は親友のような存在だった。
　しかし早世した父の代わりを努めようとしてか、ある時から年不相応に大人びた態度をするようになった。母をあるべき姿に戻したかったのかもしれない。あるいはその両方だろうが、どちらにせよその真意を僕が知ることはない。兄は十八の時に失踪した。父の形見で母が大切にしていた結婚指輪を持って。リングの内側には名前が彫られているから大した値打ちもないだろうが、家には指輪以外に現なまに変えられるものがなかった。値打ちのあるアクセサリーやらバッグやらは既に母が質に入れてしまっていたからだ。父に貰ったものも、指輪以外全てだ。

　不意に、それでいて自然に、あの家の鍵を使う人間は二人だけになってしまった。それでも世界のダイヤに乱れはなかった。つまり、一日はやっぱり二十四時間だし、生きてる僕らは平等に年をとる。
　あの時膝から崩れ落ちる母を見て、僕は漠然とジェンガ遊びを思い出したのだった。いくら共感能力のある人間でも他人を百パーセント理解することは不可能だ。彼女の中の何かは壊されてしまったのだ。兄が壊したわけではない。ゆっくりと、しかし着実に蓄積された悲しみによる当然の破滅。たった一つ

の無駄歯が外れただけであってもその歪みは肥大化し、化膿して腫れあがってから気づいても手遅れだ。
　僕の目はルームキーの向こうの霞んだ世界を捉えた。あの空っぽのボックスに彼女は何を見ていたのだろう。

　何気なく左のポケットに手を突っ込んだ。あれ、と思い太腿を叩くもそこには痛みがあるだけであった。部屋を飛びだして早智子さんを探すと、彼女はダイニングの奥にあるソファに腰掛けてワイドショーを見ていた。
「お休みのところすみません。落とし物をしたみたいなんです。少し車の中を確認してもいいですか？多分、シートに座った拍子に落としたと思うので」
「もちろん構わないわ」
　彼女は「ちょっと待ってね」と言って大きな腹を抱え立ち上がろうとした。僕は彼女を制止しながら「シートの周りを見るだけなので大丈夫です。少しの間、鍵をお借りしたいのですが」と言った。
「そう。そこの扉からキッチンに入って左側のリビングに電話があるんだけど、そこの」と話している途中に彼女の顔が曇り、「旦那が食材を買いに街に行ったんだった、ついさっき。落し物は今必要？」と申し訳なさそうに言った。
「いえ、それなら大丈夫です。後で探します。それより春日さんにご挨拶していなくてすみません、不在かと思って」
「全然気にしなくていいのよ、いても喋らないんだから仕方ないわ。私もいるのかいないのか分からないし」
「お邪魔してしまってすみません」
「あ、待って」
「なんですか？」
「悪いんだけどコーヒーのおかわりをいれてくれない？カウンターのポットに残ってる分」
「もちろんです」
「熱いから気をつけて」
　僕は彼女からカップを受け取って言われた通りにコーヒーを注ぎ、「何かいれますか？」と聞くと、彼女は大丈夫、と首を横に振った。その動きに合わせて彼女の短い髪が揺れた。
「どうもありがとう。立つのが億劫で」
　彼女の摩っている腹を見て「そう見えますね」と僕はこぼした。
「これがあんまりフカフカだから」と彼女はソファにもたれかかり、あどけない少女のように笑った。つられて僕も笑った。

「荷物の整理はどう？」
「最低限の必要なものしか持って来なかったんです。だからすぐに終わりました」
「ならよかった。何かあったら遠慮なくすぐに言ってね」
「ええ、お気遣いありがとうございます」
　では、と軽く会釈して踵を返そうとしたが、早智子さんに「さっきも言ったけど」と呼び止められた。
「今日は疲れてるんだからゆっくり休んで。探し物が気がかりなのは分かるわ。でもある程度は肩の力を抜くべきね。目の前にある物も見えなくなるから」彼女は僕の目をまっすぐに見ながらにこやかにそう言った。

　僕は部屋に戻って煙草を咥え、何をして待とうか考えた。すべきことは何もなかった。たっぷりと肺に送られた煙は僕が軽く口を開いただけで森へと吸い込まれた。何度かそれを繰り返しているうちに吸い殻が三本増えていた。そして再びベッドに身を投げ、陽の光を受けた埃が部屋を漂うのを眺めた。窓から陽が差すのは素晴らしい。ふと何とも言えない虚しさがこみ上げ、あそこに置いてきたしわくちゃの手紙を思い出した。

親愛なる弟へ
俺はもういません。
しばらくでかけます。
ひとりきりにさせてほしい。

　まずとても小さなエンジン音が静けさを破った。音は徐々に大きくなりリアリティをもってすぐそこまで近づき、そして再び静けさが訪れた。僕はその人に会うべく重い腰を持ち上げて玄関へ向かった。
　ガレージには一九〇センチ程もある男が買い物袋を両手に提げていた。服の上からでも分かるほど体は分厚く、健康的な褐色の肌。きつく引き締められた口には荘厳な人柄が表れていたが瞳には柔和で優しい色があった。
「こんにちは。今日からお世話になります、早智子さんの甥の」
「ああ、家内から聞いてるよ」
　彼はよろしく、と言って僕の手をぐっと握った。手は硬くごつごつと骨ばっていて指の先には清潔に切り揃えられた爪が張り付いていた。
「肺はどうだ？」
「ええ、とても良い調子です。きっと空気が澄んでいるのでしょうね」

それを聞いて静かに頷き、「ここではゆっくり、自由に過ごすといい。あと、悪いが今家内はああだから手伝ってやってくれ」と言った。彼はぼつり、ぼつり、と喋るようだ。低い声で紡がれる言葉には芯があり、聞き手に自然と安心感を与えるものだった。口元が自然と緩むのを感じながら僕も静かに頷いた。

「ああそうだ、車の中を見てもいいですか？先ほど早智子さんに乗せてもらった時、落とし物をしたと思うので」

彼は「好きに見てくれ」と言ってドアを大きく開いてくれた。僕は座席に頭を突っ込んで周辺を探したが何もなかった。車に乗り込んでシートベルトの隙間や床をくまなく探したが結局のところ鍵は見つからなかった。

「お待たせしてしまってすみません、もう大丈夫です」

「何を落としたんだ？」

「家の鍵です」

彼は眉間にしわを寄せて、そうか、とだけ呟いて少しの間黙り込み、今度は確信に満ちた声色ではっきりと「大切なんだろう？見つかるさ」と言い、僕の肩をバシッと叩いた。絶望的展望しか見えず、僕はすでに諦めかけていた。だがその言葉を聞いた途端本当に見つかるような気がしてきた。春日さんの言葉には不思議な力があるのだろうと直感的に分かった。そしてその力を持ち合わせない僕はその通りになることを祈るぐらいしかできないのだ。

彼は地面に置いていた買い物袋を再び両手に提げて歩き始めた。それを指して「ひとつお持ちしましょうか？」と尋ねたが、無愛想に、いい、とだけ言ってずかずかと歩いていってしまった。

初対面とは思えないほど彼に対して良い印象を受けていたし、形容しがたい無類の信頼感を感じていた。血縁関係の無い僕に対しても、温かい目線を向けてくれたことが無性に嬉しかった。母はよく、春日という大男は貪欲で、狡猾で、男尊女卑的な古い思想を持った、そう、『美女と野獣』に出てくるガストンのような奴だと語っていたが少なくとも僕にはそう見えなかった。僕の目には彼は野獣に映った。無論それは良い意味でだ。むしろ母の中の春日という男は彼女の夫である父そのものだった。

窓に寄りかかりながら一日を終わらせる一服をしていた。分かったことと言えば、まず春日さんの料理が絶品であること、どこの部屋にもクーラーが無いこと（わざわざ確認した）、短い人生の中で一番美しい星空が拝めたこと、腹に巣食う子供がとんでも

なくラッキーということだ。

強面だが優しい心を持つ春日さんと向日葵のような笑顔を浮かべる早智子さんは、ごく普通のありふれた夫婦で、誰もが認めるであろう理想の父母像だった。子供はパンケーキにかけるメープルシロップのような愛情をたっぷりと注がれ、風や陽の光や木々の香りと遊び、毎晩星たちの語る話を聴いて眠りにつくのだ。きっと沢山の友達を作り、思春期を迎え、普通ぐらいの大学で恋人と出会い、正しく幸せになるのだろう。気が滅入りそうだ。親指と人差し指で挟んだ煙草の微かな赤を灰皿にこすりつけた。途端、そこにいた蛾も羽虫も闇になった。ジージーと鳴く声だけが新月の夜に取り残されていた。

数日経つと客が泊まりに来た。初めにやって来たのはロッジの常連らしい五〇代の太った男で、ポロシャツには主張の激しいラルフローレンの大きなロゴがあった。彼は僕を良く思わなかったらしく、すれ違いざまにも学生風情が、と吐き捨てるような奴だった。

左手をポケットに突っ込んでも虚しくなるだけだったから、ニコチンを脳に送り込むスパンが短くなったのも仕方なかった。醜く肉付いた頬を思い切りぶん殴ってやりたかった。しかし無論平身低頭するしかなく、そのやるせなさに余計参ってしまった。

男のチェックアウトの日、入れ替わりで新しい客が十七時にチェックインだった。シラナミという二〇代半ばの女だった。ノースリーブに短パン、スニーカーというアクティブな恰好で、小柄な彼女の担いできた革のギターケース、高く結われたポニーテールが印象的だった。

手続きが済むと早智子さんはにこやかに「ゆっくりしてね」と言って白波に握手を求めた。白波は大きな瞳でまっすぐ早智子さんを見て「ええ」と笑顔で応えた。彼女は僕に振り返って「君は？」と尋ねた。

「僕は仕事の手伝いに来てる早智子さんの甥です。清掃とか事務的なことしかできませんが」

「へえ、よろしく。たったの三日だけど」

彼女は僕の目をやはりまっすぐに見つめながら握手を求めた。長い睫毛に縁取られた黒い瞳の双眸には気を抜くと吸い込まれてしまいそうな力強さがあった。僕は笑顔を張り付けて「こちらこそ」とぎこちなく彼女の手を握った。思いの外皮の厚い大きな掌で、第二関節が大きい。彼女は「荷物を置いたらこの辺りを散歩してきます。十九時には戻ります」

と言い残して颯爽と階段を登っていった。その日、白波を見かけることはなかった。

次の日、僕は二階の部屋のセットをすることになっていた。窓を開けると、ギターをチューニングしているらしい音が聞こえ、やがて何かのメロディの端々が聞こえてきた。上手い演奏だった。どうやら隣は窓もドアも開けっ放しにしているらしい。繊細で丁寧なギターの音色は湿った木製家具を嗅ぐような、生温い大きな浴槽を揺蕩うような気分にさせた。

あとは布団のしわを伸ばすだけという時に、聞き慣れた音の運びが耳に入った。彼女はそれに歌をのせた。羽化した蝉の翅を思わせる透き通った声色で、発音も綺麗だった。僕はそのやるせない鎮魂歌をよく知っていた。歌が終わると同時に窓に向かって拍手を送った。

すると明らかに近いところから「ありがとう」と聞こえ、窓から頭を出してみると同じように窓に両手をかけた白波が穏やかに微笑んでいた。

「こちらこそ。偶然すばらしい歌を聞けて光栄です」

「ねえ、仕事終わった？」

「ええ」

「なら少しこっちに来ない？今人と喋りたい気分なんだ」

「そうおっしゃるなら」

僕は言われた通りに隣の部屋に入った。服やタオルや浴衣なんかが乱雑に端によせられており、机の上には飲みかけのホワイトホースがあった。そして部屋の真ん中には革のギターケースが大きく口を開いて置いてあった。

「呼びつけて悪いね」

「午前の仕事は202のセットと洗濯干しだけなんです。どうせ時間は余りますから」

「敬語は好きじゃないんだ。ねえさっきの歌の感想を聞かせて」

「ああ、さっきの演奏は今まで聞いたことのある弾き語りのなかで最高だった。ギターも、白波さんの歌も。あなたが二人いないのが惜しいぐらいに」

「照れるね、面と向かって褒めてもらえると。あ、ねえ、今すごくいいことを思いついたんだけど、今度は君が歌う？好きなんでしょう？私がハモリをいれるからさ」

「僕は白波さんみたく上手く歌えないし、第一、音楽は好きでもないよ。よく分からないから」

「…君が分からないんだったらきっと私も分かってないし、誰も分かっていない。私が歌えるんだから君も歌える。みんな同じ形の脳味噌だし、ほとんど

同じ仕組みのカラダなんだから。さっきの歌は好きなんでしょう？好きな歌があるってことは、音楽が好きなんじゃないの」

「さっきの歌が単に良かったと思っただけさ。うん、あなたは少し変わってる」

彼女は残念そうに「そうみたい」と言って小さな冷蔵庫を開けた。そしてビールを二本とチョコレートのパウチを取り出して「じゃあ乾杯しよう？サイモンとガーファンクルに」とビールの片方を突き出した。僕はそれを受け取った。

「ねえどうして音楽に遠慮するの？」

僕は少し考えてから「僕にはそういった芸術に対する受容体が備わってないから」と言った。彼女は興味なさげにへえ、と呟き、手に持った缶を眺めながら「どうしてそう言えるわけ？」と尋ねた。

「そうだな、音楽とか本とかの類に恋してた人が身近にいたんだ。そいつが語るそういう世界の話を聞くのは好きだった。それで僕も試したんだけど、そいつの愛した作品はまったく全部つまらなかった、どういうわけだか。つまり僕には良さというか、説明のつかない感覚的なもんが感じ取れないんだ。いや、正確には感じはするんだけど、果たして良いのか悪いのか、好きか嫌いかすら分からない。うん、実際、嫌いになれない歌だって片手の指で足りちゃうぐらいしかないんだよ」

彼女は空になった缶を潰して机に置いた。

「最初から良し悪しなんか無い。だからお手伝いくんの言うことは理解できない。当たり前なんだけどね。君は私じゃないみたく、私は君じゃないから」

「その通りだ」

「でもそれじゃ寂しいでしょう？」

彼女は二本目のビールを取り出して「だから教えてあげる」と、チョコレートを一つ口に放った。同じように僕もチョコレートを口に入れた。それは口内でどろりと溶けて甘ったるい風味が広まった。

「ねえチョコを食べるとき、ただ甘い、おいしいって思うでしょ。カカオの産地がとか、成分がとか、気にしない。どうして人にとってチョコはただ甘くておいしいのか。作った人が魔法をかけてるからなんだよ」

コンビニで売られている安価なチョコレートは機械で大量生産されているのだろうけど、僕は黙っていた。彼女はギターを担いで弦を指で弾いた。ビンと鳴った。伏した睫毛が影を落とし、鋭い光を宿す黒い瞳を隠した。

「私も魔法使いなの。これだと音楽じゃないただの音だけど、こうして音を重ねて、組み合わせると、

メロディになる。そしてこれに合う気持ちいい音を歌えば魔法になる。ね？単純でしょう」
「うん」
「いろんな魔法使いがいる。私みたいな人とか物語を紡ぐ人、絵を描く人みたいにね」
「そういう芸術を謳う奴は詐欺師だと思ってた」
「人は平等に感性を持ってるからみんな魔法にかかるはずなんだけどな」
「僕には感性が無いんじゃなくて、耐性がある」
「そういうこと」
　白波と僕はたわいない話を太陽が真上に昇りきるまで続けた。彼女は都内の小さな会社に勤め、その傍らで歌手の夢を追いかけているらしい。オペレーターの大変さだとか、同僚が馬鹿でくだらないだとか、そんなことを言っていた。確かにオペレーター向きの綺麗な声だと思った。そして故郷をテーマに曲を書こうとしたが筆が進まず、実家には帰れないためここに宿泊しに来たと言う。
　彼女は話を聞いてくれたお礼にと、僕にリクエストはあるかと尋ねた。ニルヴァーナやクイーンのことを考えた。兄の慕っていたバンドだ。でも彼女の声には合わないだろう、と考え、歌う姿を思い浮かべた。結局、彼女は今日二度目となる歌を歌った。やっぱり僕は歌わなかった。その代わりに右ポケットの半ダースばかり入った煙草の箱と紙幣を口の開いたギターケースに置いた。彼女は何か言おうと口を開いたが何も言わなかった。

　ドンドンドンドン、という大袈裟なノックと、「ご飯の準備できたわよ」という大声で飛び起きた。ここに来てから毎晩三人で揃って春日さんの作る夕食を食べた。夕食は家族で食卓を囲んで談笑しながら食べる、というシステムらしく親戚である僕も例外ではなかった。始めのうちは支度を手伝おうとしたが、むしろ余計に時間がかかると判明してからは任せてしまっている。
　食卓には彩りの豊かな料理が三人分、整然と並べられていた。真ん中の大皿にはできたてと思われるししゃもの天ぷらが盛られていた。
「今日もとても美味しそうですね」
「ええ、食べなくても分かるわ。旦那の作る料理はね、食材が何であれいつも美味しいの。お喋りに口を使わない分、食のために使う人なのよ。だからこの人は美味しい料理をつくれるの」
　早智子さんは「いただきましょう」と少女のように笑い、僕たちは手を合わせた。彼女の言う通り、和食だろうがフレンチだろうがイタリアンだろうが

春日さんの作る料理は全て美味しかった。無論、客のメインに出す和牛や大きな海老なんかを僕たちは食べられないのだが、材料なんか気にならない。料理は毎日文句なしの絶品だ。きっと春日さんも魔法使いなのだろう。贅沢な飯を毎日投与される腹の子供は舌が肥えてしまうんじゃないかとか、良質な血肉になるだろうとか、つまらないことばかりが浮かんだ。

調理された料理の素晴らしさはここに来てから知った。母は料理が苦手だから総菜や冷凍食品をなるべく綺麗に、それらしく盛り付けることが上達していった。料理よりも皿やどんぶりにこだわる人種なのだ。ふと、兄が母のそれをよくロココ料理だと揶揄っていたのを思い出した。それを話すと、早智子さんは短い髪を揺らしながら口を開けて笑い、春日さんの小さな目は三日月の形になった。理想の食卓。今日もいつもの素晴らしい晩餐になるはずだった。

「…ところであのね、責めるつもりはないんだけど、煙草に依存しすぎじゃないかしら」

早智子さんが何気ないことのように切り出した。手が止まり、音も止む。春日さんも僕をじっと見ていた。さっきまで笑っていたのに。僕はもう気が滅入ってしまった。

「あなたは肺を悪くしているでしょう。詳しくは分からないけど、お医者さまも止めてるんじゃない？控えたほうがいいんじゃないかって旦那と話していたのよ」

「ええ。はい、そうですね」

しばらくそのまま黙っていたが、時計の針の音が僕を責めた。

「あの、でも僕はね、多分ニコチン中毒なんです。これは遺伝であり、僕の個性だとも思ってます。左肩が高いとか耳たぶが小さいとか、そんなのと同じ程度のことです。うん、決して病気じゃない。それに、肺炎はうちの汚いエアコンのせいであって、煙草が作るのは結局のところ、がんです。肺炎の一因ですらないんじゃないかって僕は思ってます。しかしそうですね、早智子さんの言う通りでもあります。控える努力はします」

自分のことを喋る時、僕はいつも口下手になる。正しい言葉、正しい順序で説明できない。夫妻は悲しげな表情を浮かべてそれを聞いていた。

「分かるわ。ただ私たちは、あなたを家族みたいに思ってるの」

「すみません、喋りすぎた」

「うん、全部あの馬鹿女のせいなのね。あなたは悪くない」

「僕が不幸ならそれは僕のせいでしかない」

「いいえ。違うの、あの女が悪いの。あいつは幸平くんが生まれた時から、いや、その前からもクズだったけど、今じゃ拍車をかけてクズね。大切な人達が死んでるってのに、どうして何もかもが浅はかなのかしら。子供に寄り添えないのかしら。きっと頭がおかしいんだわ」

「まあ、そうかもしれません。でも父と兄が消えたのは彼らの意思だと思います」

　春日さんもいつの間にか食べる手を止め、明らかに不快がっていた。

「早くあの女から離れた方がいい。そうすれば全部いい方へ向かうわ」

「…」

『『美しきおバカさんでいることが女の一番の幸福』って、デイジー・ブキャナンの最悪の発言だけど、確かにある意味では的を得てるとも思うの。ほら、あそこの棚の置物が見える？」

「マトリョーシカですね」

「私あれを見る度に馬鹿姉貴を思い出すのよ。ねえ、気の利いた台詞が真実とも限らないのよ。だからあなたは空っぽになっちゃだめよ」

　僕は「分かりました」と言ってまた料理を口に運び始めた。置き去りにされたししゃもはすっかり冷めていた。

　長身が短針に追いつく。二つの影が真上で重なったかと思いきや長い方の片割れがまたじわじわと離れていく。そんな時間になってしまった。今日は僕が最後に風呂に入って湯を抜く係の日だった。立ち昇る湯気をたどった先の灯りには蛾や羽虫がたかっていた。湯に浸かり、不規則に飛ぶ彼らをぼんやり眺めた。空は真っ黒の生地にレモンのアップリケを縫い付け、スパンコールを撒いたみたいだ。

　目を瞑ると色々な虫の歌が木々の隙間に響いていることに気づいた。僕だけが仲間はずれだったのか。それに気づいてしまうとやりきれない虚しさがこみ上げた。どんな虫が、一体どうしてなくのだろう。魔法がかからないから、僕には彼らの言葉が伝わらない。母のなき声が頭の内側に聞こえた。父が死んだ後、彼女は二人の間に愛を捏造し、父を想って泣くことを覚え、その愛を兄へ注ぐようになった。彼女が僕へ注いでくれたのはバームクーヘンの芯みたいな情けだった。

　すすり泣く声。それは今度ははっきりと、鼓膜を通して聞こえた。それが聞き覚えのない声だったら僕は飛び上がっていただろう。なんとなく罪悪感を感じ、音を立てないようじっとしていた。しばらくして嗚咽交じりの声は音程とリズムをもった。声は掠れ、独特の熱を孕み、崩れ落ちそうな脆い歌だっ

た。でも僕はなんとなく歌の終わりに拍手を送った。
「気を悪くしたらごめん。どういうわけだか、すばらしい歌を聞くと拍手せずにいられない質らしい」
「歌嫌いって言ったじゃない」
「嫌いだけど君の声は嫌いじゃない」
「嘘つき」
「本当だよ」
「君じゃなくて、お前が」
「どういうこと？」
「いや、なんでもない。お褒めいただきどうもありがとう」
「ああ。そうだ、悪いけど少し急いで出た方がいい。本当は十二時に消灯で、風呂も終わりなんだ」
　塀の向こうは静かになった。僕は若干のぼせていたしすぐに風呂から出て軽く全身を洗った。少しすると向こうからもシャワーを使っているらしい音が聞こえた。洗い終わって湯を抜かなきゃいけないと思い、栓を探すために水底を覗き込もうとした。目が悪いからよく覗き込んだんだ。ゆらゆらと映ったのは見知った顔だった。水底からのびてきた手が僕の腕を掴んで引っ張った。
　兄と対峙していた。横顔は見慣れていたが、正面から見るのはいつぶりだろう。懐かしいというより新鮮に感じた。母似の兄は端正で爽やかな顔立ちをしている。
　その顔が次第に溶けおち、文字通りぐちゃぐちゃになっていった。僕は目を逸らさず黙ってそれを見ていた。生皮が剥げて眼球はどろりととろけ、顔の孔という孔から蛆が這いずり、煙草の灰みたいな色の骨が見えた。その骨には食べかけのチキンみたいに肉がくっついたり離れたりしていた。眼窩から這い出てきた大きな黒い虫が忙しなく触覚や脚を動かし、肉片や汁を飛ばしながら貪った。耐えがたい腐臭が漂った。
　きれいな皮の中身はずいぶん醜い。僕は右ポケットのライターを握り火を点けた。炎は顔を呑みこみ、肉が剝がれ落ちて兄の面影はなくなった。たった十分ほど（実際にかかった時間は分からない）でそこにはただ焼ける人がいるだけになった。飛び散った火の粉が降りそそいで熱く、変な匂いはするのに、サイレント映画のように音だけが無い。
　よく焦げた骨と並びの悪い歯を残してやがて火は消え、間抜けに開いた下顎には失くしたはずの鍵がぶら下がっていた。火を灯し、灰になる。煙草みたいだなと呑気なことを考えていると、ライターを握っていた手が近づき、やがて僕も同じように炎に包まれた。僕も灰になるんだった。

気がつくと脱衣所のベンチで仰向けになっていた。体を起こそうとすると頭が痛んだ。
「大丈夫？」
目をやると白波が立っていた。彼女は下着だけを身につけ、水を滴らせた長い髪が姿勢の良い細身の体にまとわりついていた。ぴんと伸びた背筋のせいか、いやらしさは全くなかった。僕は痛む頭を抑えながら頷き「おはよう。一人でここまで運んでくれたの？」と尋ねた。
「うん。あのままだったら死んでたよ。私がいてラッキーだったね」
「そうらしい」
「もう少し横になってた方がいい。頭を強く打ってるから」
彼女は扇風機の前へ行き、ドライヤーで髪を乾かし始めた。僕は彼女の言う通り仰向けにもどった。とても長くて果てのない夢を見た気がしたが、うまく思い出せない。ただひどい気分で喉が渇いていた。
「ひとつ聞いてもいいかな」
「もちろん」
「どうして人は死んだ人間ばかり評価するんだろう」
彼女は黙っていた。髪がドライヤーの風にさらさらと靡くほど乾いてから「喋らないし変わらないから」と単純な答えをくれた。確かにその通りだった。

頭痛は先刻よりもいくらか和らいでいたので僕はとりあえず服を着た。
「ねえ私も聞いていい？」
「僕が答えられる範囲なら」
「私が魔法使いに見える？」
「あなたがそう言ったじゃないか」
「詐欺師は嫌い？」
「そうでもない」
「どうして君に嘘をついてると思う？」
どうして自身を嘘で固めているのか、僕は知りたいだろうか。知る必要はあるだろうか。僕は彼女のついている様々な嘘を察していた。たとえば、彼女が身の丈に合わないハリボテを示していたとする。それでも僕の目に映る白波という人間はそれ以上でも以下でもなかった。
「どうだろう」
僕も彼女も黙っていた。ほんの数分だがその沈黙は経験したことがない程長く、重く、あまりに苦しいものだった。地獄すら甘美に思える沈黙を破ったのは彼女だった。
「溶けちゃった」
「溶けた？」
「チョコ」
彼女は洗面台の上を指した。からっぽのフルボト

ル瓶と小さな袋が置いてある。昼にご馳走になったチョコレートだ。チャックを開けてみるとどろどろになったこげ茶色が袋の内側にべっとりとついている。それが溶けるのは分かりきったことだった。白波の黒い瞳の目には涙がいっぱいにたたえられ、溢れたそれが睫毛を濡らし、頬を伝った。僕は礼と挨拶を言って彼女と別れ、自室に向かった。

長く静かな眠りから覚めると彼女はすでにいなかった。朝食を食べてすぐロッジを後にしたらしい。昼時だというのに空はどんよりと曇って暗い。

203号室の清掃を任された。部屋の床には空き缶や瓶が転がり、相変わらずタオルや浴衣は散乱していた。換気のために窓を開ける。雨が降りだしていることに気づいた。まずゴミを片付け、シーツ、タオル、浴衣といった一式はまとめて洗濯かごに放った。クローゼットや机の中を開けていると、引き出しに見覚えのある煙草としわくちゃの紙幣が入っていた。窓に両手をつき、一本を取り出して火を点ける。濡れた草の青々とした匂いと煙が混ざり、森と僕は溶け合った。しかし火はすぐだめになってしまった。

なんとなくあの引き出しが閉まっていることを思い出した。小糠雨の降りしきる森からはしきりにぴちゃぴちゃと泥の跳ねる音が聞こえる。作業を終えると、彼女がいたことを示すものは無くなった。

103号室の引き出しが閉まっていることは夫妻も知らなかったらしく、鍵屋に見てもらおうかと言われたが断った。鍵を開けない限り、机の中には重なり合った二つの状態が存在する。そこで眠る猫の生死を僕が知る必要はないと思っていた。

時間はいたずらに過ぎていった。宿泊客とは最低限の関わりしか持たなかった。たまに近辺を散歩したり車で街まで行ったりするぐらいで、基本は灰皿に吸い殻が溜まり、それらを捨て、洗って、またそこへ灰を落とすという日々だ。ビールも煙草もうまいし春日さんのご飯は何よりうまい。結局のところ僕はそのハッピーセットで満たされた。

「昨夜未明、長野市の河川敷で女性の遺体が発見されました。警察は事件に巻き込まれた可能性があるとみて捜査を始めました。次のニュースです」

勝手に流れていく十把一絡げのニュースを無為に眺めるのは気が楽だ。くだらない不倫報道も殺人事

件も、ここじゃない遠くの星の宇宙人が大袈裟に喚き散らしているようにしか見えない。

「八月十四日、水曜日の全国の天気をお伝えします。台風十一号の接近により、関東、中部地方で荒れた天気となりそうです。西日本にも湿った空気が流れ込み」

「今夜はスーパームーンですが残念ですね。そもそもスーパームーンとは満月が最も近づくために大きく見えることでして」

キャスターは用意されたパネルを指さしながらどうして月が大きく見えるのか説明し始めた。月なんか放っておいても気まぐれに大きさが変わるのだから興味はない。

「残念ね」

僕と早智子さんは並んでソファに腰掛け、ブレンドコーヒーを飲んでいた。アイス・ティーとサンドイッチを食べて、昼のワイドショーが終わるまで淹れたてのブレンドで休憩をとる。ここ数日の日課だ。なんて贅沢な過ごし方だろうと毎度思う。なぜ月が大きいかよりもすばらしい昼の過ごし方を指南した方がずっと有益だと僕は思った。窓から柔らかい日差しが差せば完璧な午後なのに、生憎空は暗い曇天で風が窓をガタガタと揺らした。

「せっかくなのにこの天気じゃあね。この辺りは星も月もよく見えるのに、晴れてくれたらなあ」

「そうですね、近頃雨ばかりだ。ニュースも物騒だし」

「どうして気が滅入るようなことばかり報道するのかしら、ニュースって。誰が死んだ、殺された、浮気したって。犯罪者よりも善い行いをしてる人の方がいっぱいいるのに」

「そのうちみんな人間不信になっちゃいますね」

カップの黒い水面には輪郭の失われた僕が映っていた。僕らはしばらく黙り込み、月の見え方というどうしようもない知識をありがたく享受した。早智子さんは腹を愛おしそうに撫でていた。彼女を蝕むそれが遠くないうちに腹を食い破って出てくることを考えた。愛情を餌にむくむく育ち、家を侵す蟲になるだろうか。

早智子さんが遠慮気味に、ひとつ気になってるんだけど、と口を開いた。

「あなたのお母さんは、あの陰気臭いハゲを家にあげてはいないわよね？」

突拍子のない問いかけに僕は面食らった。十中八九、兄の件で世話になった仏具屋の主人のことだろう。いつ見ても顔に影を落としているくせに中古の外車を乗り回している。彼女に贈ったブランドの腕時計だってどうせアウトレットのジャンク品を買っ

たのだ。すぐに時間が狂う。そして僕がいない大体の日、母がその男を連れ込んでいることは明らかだった。

「どうでしょう、少なくとも僕は知りません」

「そうよね、急にごめんなさい」

母の瞳に僕が映る日はいつ来るのだろう、来ないのだろうか。

二人は僕に良くしてくれる。それなのに、ここにいると寂しさは募るばかりだ。共産党の国の囚人が看守に睨まれるみたいに、四六時中孤独に見張られていた。奴としきりに目を合わせなければならなかった。その度に気が滅入る。

午後、洗濯物を畳んでそれらを定位置に戻し、二つの部屋をセットした。残っている仕事は今朝早智子さんに頼まれた外の犬小屋の掃除だった。犬好きという人は山ほどいるだろうが、彼女の執着には幾らか異常な部分があった。実の父母の仏壇よりもポチ（夫妻が飼っていた耳の垂れた雑種犬。洗剤を誤飲して死んだらしい）の遺影に新鮮な花を供える人だ。

いない犬の寝床は雨にさらされみすぼらしく見えたが、手違いで生き返っても使えるぐらいには劣化していない。土の中で静かに眠っているのだから無駄な作業だと思いながら、仕方なく雨に打たれながらその小屋を雑巾で拭きあげ、辺りの雑草を抜いた。泥に塗れた草の塊。あれを小さく口ずさんだ。パセリ・セージ・ローズマリー・アンド・タイム。呪文が成功したかのように体を打ち付けていた冷たさが消えた。

「こんにちは」

振り返ると、二十歳前後と思われる女の顔が目と鼻の先にあった。彼女は微笑みを浮かべ、僕を傘の中に入れてくれていた。

「ありがとうございます。でももうびっしょり濡れてしまってるので」

透き通ってしまいそうな肌に散ったそばかすがチャーミングだが、引力をもった黒い瞳の感じがどことなく不安を感じさせる。羽織っているシアーシャツと髪は濡れて肌に張り付き、ワンピースからはひょろりと手足がのびている。

「もしかして宿泊される方でしょうか？」

「はい」

「お名前を伺っても？」

「イズミです」

「確認します。濡れるのでこちらへ」

「ここにいます」

「そうですか、ではすぐに戻ります」
　僕は小走りでロッジへ向かった。今日来るうちの一組は夫婦で、すでに部屋にいる。もう一人宿泊予定ではあるが、そこに「イズミ」とは書かれていなかった。外に出ると女は忽然と消えていて、しばらく待った。降りしきる雨のせいで薄いカーテンで隔てられたような視界だった。

　僕は早智子さんにイズミと名乗る女の話をしてから早々に風呂に入って自室へ戻った。いよいよ台風が上陸したらしく激しい雨が屋根に打ち付けられる音、氾濫した水が勢いよく流れる音が聞こえる。僕はゲレンデの山の禿げたところを流れる濁流のことを考えながら眠りについた。白波の頬を伝う涙の筋が思い出された。

　目を覚ますと昨夜の雨が嘘のように晴れた。心地いい陽気だったからいい気分で目が覚めた。しかし僕はあれから三度目となる203のセットをしなければならず、そこで煙草を吸うことにした。朝陽が射した蜘蛛の巣を飾る露は何カラットのダイヤにも勝る眩さだったのに、なんとなく気が滅入っていた。
「おはよう、雨ざらしのハチ公さん」

　声の方を向くと、半分開いたドアの傍にイズミが立っていた。急いで煙草を灰皿に擦りつけた。
「イズミさん。ハチ公って僕のことですか？」
「ええ。可愛いでしょう」
「心外ですね。あなたがいなかったから待っていたのに」
「気分が悪くなって少し歩いてたの。それにしても優しいんですね、雨の中人を待ったり、犬がいない犬小屋の掃除をするなんて」
「頼まれただけです。悪いんですが仕事があるので」
「お昼は空いてますか？せっかくのお天気なのに一人なのも寂しくて。それとも煙草ふかすので忙しいんでしょうか？」
　僕は諦め、いいですよと頷いた。彼女は安心したように顔をほころばせて「じゃあ十二時に玄関にいてくださいね。あとこれは昨日のお詫びです」と言い、僕にチェルシーを渡して去っていった。暑さのせいか少し溶けたそれを口に入れると口内はバタースカッチの独特な甘ったるさでいっぱいになった。

　気乗りはしなかったが仕事を前倒しに終わらせて言われた通りにした。イズミは約束の時間からだいぶ遅れて来た。そして「すみません、また待たせましたね」とポケットから例のピンクの包みの飴を差

し出して言った。もう結構です、とそれを受け取らなかった。
「今度はパブロフくんとでも呼びたいんですか？」
彼女は少し考えて「それもなかなか悪くないですね」と真剣な顔つきで言った。僕が勘弁してくださいと言うと、彼女は笑った。
「簡単なお昼を作ってたんです。ピクニックには欠かせないでしょう？」
「素敵ですね、何を作ったんですか？」
「サンドイッチとアイス・ティー」
「完璧ですね」
「ゆっくり過ごせる場所を探しましょう。こんなすばらしい日ってないですから」

僕らはずっと山を下りつづけた。どこがゆっくり過ごせる場所かも分からないからただ歩いた。歩きながら時々煙草を吸った。先端からは白いのろしが蜘蛛の糸のように空高くのびていく。葉の緑、蝉の声、空気の運ばれる音、土を踏みしめる感触を確かめた。例えば来年またここへ来たとして、目には同じ色の景色が映るだろうし、同じ香りと同じ音を感じるだろう。それでも、その緑も蝉も風も土も、今僕を包んでいるものではないのだ。風に吹かれた煙が目に沁みた。

畦道を歩いた。ランナウェイ説の性淘汰だとか、アーノルド・ローベルの絵本だとか、荘子の思想だとか、そんなことを並べて価値観を確かめ合った。イズミは少し変わっていた。喋らない間も彼女は飴を舐めたり歌を口ずさんだりしていた。絶えず口を動かさないと気が済まない人種なんだろう。
僕はポケットの小銭でビールを買って飲んだ。彼女も喉が渇いたと言い、今度は二本買った。そしてお礼にと、僕のポケットにピンクの包みを入れた。どうやらチェルシーが通貨とでも思っているらしい。
「見て。羽付きナプキンが空舞ってる、うけるね」
「あれは馬鹿な鳥だよ。翼を広げてるくせに落ちてるんだ」
「違う。生理がついてたもの」
「じゃあ怪我してたんだ、別にどっちでもいいよ」
「何のためにここへ来たのか分かった気がする」
「羽付きナプキンで？」
「ふざけないでよ」
「心の療養って言っただろう？」
「どうして来たか知りたい？」
「どうだろう」
「じゃあ言わない。ハチくんはどうして来たの？」
「肺の療養と叔母さんの手伝いって言ったじゃないか」

「それだけじゃないでしょう？」
「そうかな」
　じゃあ僕は何をしに来て、どこへ向かうと言うのだろう。
「みんな各々の大きな運命に沿って生きてる。人生の中の大事な時間って、その時には気づかないけど後から俯瞰してその局所を知るものでしょ。でも私はなんとなく感じるの」

　草の匂いが濃くなり突然夕立が降り出した。僕らは子供みたいにばしゃばしゃと飛沫を飛ばしながら来た道を走った。泥が跳ねてもアイス・ティーの入ったポットを落としても構わなかった。生憎ロッジの手前で雨の勢いは弱まり、厚い積乱雲の隙間から陽が差した。風景は新鮮で幻想的だがバケツを被ったような僕らの風貌はデジャヴだった。
　僕らはロッジの手前のホテルで風呂に入ることにした。水面にはジャグジーの泡が絶えず漂い、僕とイズミの体は輪郭を失った薄橙色になって揺れた。
「教えてくれない？さっき話してた理由、というか目的」
「気になる？」
「うん」
「頭おかしいって思うでしょうけど、同じ人をもう何度も殺してるの。で、きっとまたそうしなきゃいけないのよ」
「どういうこと？」
「さっき胡蝶の夢の話したでしょう、夢と現実の境界が曖昧って話。喋ってる今が現実だって私は証明できない。デジャヴが起きても夢の記憶か、現実が夢にすり替わったのか分からない。でも私の場合、夢だと決定的なことがあって、決まっていつも同じ人を殺しちゃうの」
「それまで夢かどうか分からないのか」
「今回こそ現実だったかもしれないって朝泣いても、その人は変わらずにいるの。おかしいでしょう。それを四年近く繰り返してる。その人がいる世界と、その人が死んだ世界を行ったり来たりしすぎちゃって、どっちが本物なのか、ずっと覚めてないのかも分からないの」
「時間は一方通行で、過ぎた時は二度と戻らないんだ。だからあなたは繰り返しているようでも」
「うん、分かってる。時間は前にしか進まない。嘘も罪も暴かれるためにある。それを暴くために何度も死んでるんでしょうね。ねえどうして今こんな話をしてると思う？」
　イズミは底なしの黒の瞳で僕をまっすぐに見た。彼女が流した涙は頬の丘陵を伝って水面で弾けた。

「どうしてここに来たのか。僕のしたくだらないこと、つまらないことを幸平に謝りたいんだ。二人であの家に帰って一緒に歌ったり遊んだりしたかったんだ」

苦しくて空気を吸おうとしても肺に入るのは水ばかりで、やがて意識のスイッチが切れた。兄がドロドロに溶けて炎に包まれ灰になり、最後には僕が自分に火を点ける。そんな夢を見た。時間はただ前に進むだけ。感覚はなかったがずっとそう反芻していた。それ以上でも以下でもない。僕は今年で二十になって、兄より二つ年上になってしまう。

気がつくと、見知った天井の木目が目に入った。103号室だ。長い夢を見ていた気がするが何だったかうまく思い出せない。ひどい気分で喉が渇いていた。窓には蛾やカメムシがくっついていて彼らの腹部が見えた。その向こうにはやはりレモンの月が浮かんでいるだけだった。その月の欠けに無性に虚しさがこみあげ、僕は一日を終わらせる一服をしようと寝転がったままポケットをまさぐった。すると小銭、煙草の他になにか入っている。どこか懐かしさを感じさせるピンクの包みの飴だった。溶けた飴は包みにべったりくっついていた。

僕は起き上がり窓を開けた。心地の良い涼しい風が部屋に入る。机に目をやると濡れたバスケットが置いてあり、中にはぐちゃぐちゃになったサンドイッチが入っていた。そして引き出しを開けようと思った。きっと最初から閉まってなんかいなかったのだ。

引き出しの中身は鍵と指輪と簡単な手紙だった。

俺はもう遠くにいるんだろう。
そこは遠すぎて見えないし聞こえないんだ。
母さんやお前のことを考えると、
俺は幸せな気分になれる。
なんで何もかもが素晴らしいのか、
なんで何もかもが変わってしまうのか。
そのことをじっくり考えたかったんだ。
答えが見つかったらこれは捨てる。
そしたらお前とゆっくりお昼を食べよう。
親愛なる弟が読むことを祈って　幸平

鍵は僕が失くしたものではなかった。それでもあの家の鍵には違いない。ただ、僕と揃いのキーホルダーの色だけが違った。そしてあの暗くて白い部屋に置いてきた母のことを考えた。今なお、車酔いの

感覚に侵されているだろうか。それともあの男と過ごしているんだろうか。時間の止まったような家と母にも同じ時間が流れているし、過ぎた時間は二度と戻らない。彼女が落っことして失った何かが戻ってくることはない。道路のひび割れが自然に埋まらないのと同じだ。それならば、そのクラックに新しいコンクリートを流し込んで固まるまで待てばいいだけだ。たとえ元通りにはならなくとも。

静かに見下ろす月が見えなくなったら僕は東京の家へ帰る。スカボローの市へ行けたなら幸平の伝言を母に伝えようと思う。僕は窓に手をかけて歌を口ずさんでいた。風は僕の歌をずっと遠くの、見えないし聞こえない場所まで運んでくれた。

阿久悠作詞賞　選評

三田完

全体講評

今回の応募作品は５５篇。昨年より数は減ったものの、おしなべて質の高い作品がそろい、選考に難渋しました。

受賞の条件になるのは、詞を読みながらメロディーが浮かんでくること。そこが現代詩と作詞の違いです。昨年までメロディーを内包した応募作は全体のうち１篇か２篇だったのですが、今回は豊作でした。したがって、今回受賞した大賞、佳作の計４作品は、例年であればいずれも大賞受賞にあたいするレベルの作品だと思います。

さて、こんにちではもっぱら「選考」という漢字を用いますが、元来は「銓衡」です。「銓」は分銅（ふんどう）、「衡」は秤（はかり）のこと。つまり、天秤（てんびん）の皿に分銅を足したり減らしたりしながら、物質の目方を量ることです。以下、私なりにどんな分銅を足したり減らしたりして４作品を吟味したか、述べたいと思います。

受賞作品講評

大賞「たからばこ」

流行歌の詞にとって、タイトルは命です。突飛ではなく、しかし聴き手の胸に沁みるタイトルを産むために、作詞家たちは日ごろ苦労を重ねています。「宝箱」と漢字で書くと印象が薄いのですが、「たからばこ」と平仮名にした作者の感覚にプラス１点。「会いたい、逢いたい、合いたい、あ痛い」という言葉遊びは面白いですけど、まあ、それだけだと佳作。後半に出てくる「君のあまじょっぱい玉子焼き　ほんとはしょっぱい方が好きだった」が秀逸でプラス２点。阿久悠の「お酒はぬるめの燗がいい」というフレーズと同様、「あるある」感があり、心に残ります。このフレーズは前半で用いるべきだったのでは。

失恋というテーマは歌にとって月並みでもある。しかし、丁寧に言葉に挑んでいて、きっといい歌になると思います。

佳作「ため息はＣＯ２」

地球温暖化の元凶といわれる二酸化炭素。じつは私たちのため息もＣＯ２なのだ――という課題タイトルです。その本意を作者はよく理解してくださいました。プラス１点。

しかしながら、ため息を失恋のシチュエイションにしたので、詞が理に勝ちすぎた印象がありました。ため息って、もっと日常的な情けないものなんじゃないでしょうか。

同じ作者の「おんぼろ　サブマリン」もいい作品でした。才のある方だと思います。

佳作「ニィハォストリート」

ポップで面白い詞でした。タイトルもいい。プラス２点。この作品を弾けさせているのは「大家一気干杯吧」といった中国語のフレーズで、だからこそのリズムがあります。しかし、作者はそういった中国語のフレーズにフリガナを一切ふっていません。フリガナをふることなど作者にとっては野暮なことなのかもしれません。でも、これでは歌手も作曲家も歌に出来ない。これで大幅減点。作品を発表するということは、しょせん野暮なことなのです。もっと読み手に親切でなければ。

佳作「ラジオの海を泳ぐ」

クイーンに「Radio Ga Ga」という曲があり、それをもじったのがレディー・ガガというスーパースターの芸名の由来。ラジオはクイーンが唄った１９８４年でも、もうメジャーなメディアではありませんでした。

そんなラジオに心を寄せた作者の姿勢にプラス１点。ラジオのリスナーを人魚にたとえたのは文芸的に美しいと思いましたが、ちょっと綺麗すぎるかな……と。

「たからばこ」

和田　悠香

■受賞のコメント■

この度は阿久悠作詞賞の大賞に選出して頂き、誠にありがとうございます。まさか自分が大賞を獲得するとは思ってもみなかったためとても驚いています。

この賞に応募しようと決めたきっかけは、私が大好きなロックバンドのボーカリストです。彼の書く詞は人生の中で何度も私を励まし、鼓舞し、時には寄り添ってくれました。そんな彼の柔らかい詞と楽曲に触れる中で私も彼のように言葉を大事に紡げる人間になりたいと感じ、彼へのあこがれから今回作詞賞への応募を決めました。

作品は「別れ」をテーマとしています。人と人とが出会い別れる中でどんな感情が芽生えるか、そしてその感情の曖昧さと不安定さを描写しました。今回先品を作る中でこだわったのが、色の表現です。調味料を用いて一番の歌詞はカラー付き、二番の歌詞はモノクロをイメージして作成しました。調味料を用いることでより日常を感じる身近な歌詞にできたと思います。また、細かい場面設定は描写していないので聞く方によって異なる解釈をしていただけると思います。

最後になりますが、このような素敵な機会を設けてくださった明治大学連合父母会、株式会社阿久悠、明治大学文学賞に関する方々に心より感謝を申し上げます。

『たからばこ』

私たち合ってたのかな　会ってたんだけど
君が目玉焼きにかけるケチャップ
そしてゆで卵にマヨネーズ
机に溢れる調味料　ふと風が吹いた

君の隣は心が緩む
大事にしまった宝物のなかみは
会いたい、逢いたい、合いたい、あ痛い
あれどれだったけな

心が揺れるあの瞬間を
心が痛むあの想いも
宝箱に閉じ込めた
明日も持っていようと
何度も持ち直して
そっと鍵をかけた

私たち怖かったのかな　壊れちゃったけど
君のあまじょっぱい卵焼き
ほんとはしょっぱい方が好きだった
机の上はモノクローム　ふと風が抜けた

君のとなりにいた記憶で
今思い出せる宝物のなかみは
愛、哀、逢いたい、空き、飽き、曖昧
もうわからないや

心に触れたあの一瞬も
心離れたあの時も
宝箱に閉じ込めた

タイムカプセルにしよう
いつか思い出すその時まで
そっと鍵をかけた

「ため息はＣＯ２」

瀧口　遼真

■受賞のコメント■

化学。モル計算の登場以降記憶がない。数学以外で唯一赤点をとった教科。計算はちんぷんかんぷん。水兵リーベー何者ぞ。それでもメンデレーエフの髭の濃かったことと、原子・分子のくだりは今でも覚えている。

若い化学の先生がＣＯ２の分子モデルを指しながら、「二人の酸素原子ちゃんが一人の炭素原子くんにくっつきます」と言うのを聞いて、「目に見えない世界でも男を取り合うなんて、まったくどこでも男女関係ってのは大変ですなあ」と思ったことが、今回の歌詞の根っこにあります。

そこから芽が出て、実ができて、「あたし」という女の子が生まれました。そんな「あたし」がついたため息が、一本の歌詞になったと思うと感慨深いです。この度は素晴らしい賞を頂き、ありがとうございます。そして賞に関わる全ての方々に深く感謝いたします。

ひとつだけ惜しいのは、大賞ではなく佳作なので曲がつかないということ。曲がつかないのならば自分で作っちゃえば？　いやいや、私はピアノもギターもまるでだめ。音符も読めない。できることといえば、素敵な音楽に耳を傾けて、時々自分でちゃちな詞を書いてみることくらいです。

『ため息はＣＯ２』

あたしはキスしたほっぺを忘れないけど
あいつはシャワーでほっぺのキスを
流してしまった

今ごろベッドで彼女と転がりながら
「エアコンの温度下げようか」とか
話してるんだろう

炭酸水もミントのアイスも
痛みを消してくれません
あいつのことなど忘れていいのに
結局バイバイできない、なんて
なんだかシャクだよ

明日になったら窓を開けて
ひとり彷徨う原子になって
もっと素敵な誰かのもとに

きっと　きっと　辿り着くから
今夜はため息ばっかりついて
夜の温度をもっと上げて
涼しい部屋で夢見るあいつに
汗を滲ませられたなら

はあ　はあ

あたしがどれだけメイクで綺麗になっても
地球がほろびる前夜のハグは
あたしのものじゃない

ラインに一言「今までアリガト」
きっとそれだけ
あーもー　どうしてあいつの顔を
考えてんだろう

洗面台もシンクもソファーも
思い出ばかりを語るし
あいつが「いいね」と食べてたピラフを

お昼に作っているしで、ほんと
あたしはバカだよ

明日になったら灯りを消して
夜にきらめく原子になって
あいつじゃない誰かのドアを
そっと　そっと　叩きに行くから
今夜はため息ばっかりついて
夏の温度をもっとあげて
ふたりで眠るあいつの夢を
あたしの涙で濡らせたら

はあ　はあ

ファンデーションとチークとパフで
モノクロの顔をかくして
真珠のピアスで飾ったあたしは
どこかで見覚えあるんだ　ずっと
離してくれない
その手を離して

明日になったら窓を開けて
ひとり彷徨う原子になって
もっと素敵な誰かのもとに
きっと　きっと　辿り着くから
今夜はため息ばっかりついて
夜の温度をもっと上げて
ふたりで眠るあいつの夢を
気だるい汗で覚ませたら

はあ　はあ

「ニィハォストリート」

佐川　雄琉

■受賞のコメント■

この度は阿久悠先生の名を冠した賞に選出していただき、大変光栄に思います。入院中にベッドの上で書いた詞をこのような形で取り上げていただき大きな喜びを感じております。

作詞にあたり、歴代の受賞作を拝読しました。作品の繊細さや大胆さに魅了されると同時に、「自分には書けないなぁ…」とも感じたので、開き直って軽快なリズムと分かりやすい物語で楽しめる詞を目指しました。ボーカロイドを用いた作曲が趣味なので、ネット文化を創った楽曲を参考に、自分の思いを乗せようと挑戦した次第です。

この詞は「異文化交流」、「相互理解」がテーマです。最近、私たちの人間関係は希薄化したように感じられます。タイパやコスパで人間関係を値踏みしたり、コロナ渦の影響で人との関わり方を忘れてしまったり、教授の話に相槌を打てなかったり…そしてその傾向は私にもあります。だからこそ、異形の妖怪に対してもニィハォと言えるような寛容さと相手を理解しようとする姿勢を大事にしたいと感じ言葉を探りました。

改めまして、このような機会をくださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

この経験を糧にこれからも創作活動に励みます。謝謝。

『ニィハォストリート』

大家一起干杯吧！

お日様が隠れたあと
鬼たちがそぞろ歩く
ネオン光るこの道は
夢のニィハォストリート

無問題と笑う君も
猛反対とがなる君も
みんなみんな包んでく
止まんないカオスのビート

迷い子の交差点　青色の信号機
僕と君の声がほら　交わり　繋がって

来来来！好きよ嫌いよ
愛がうごめいた夜のとばり

来不来？酸いも甘いも
飲んで騒いだらおためごかし
来来来！朝は来ないで
一切合切大無礼講
もうone nightまた会いましょう
拝拝　星霞むこの道で

お月様のかくれんぼ
暗い雲から溢れる
光射す桃源郷
あれはニィハォストリート

マーラータンめん食べたいな
水餃子も追加しよう
食べ放題拒まない
吐き出す炎のヒート

お願い事をしましょ　赤色の提灯に
声を聞かせてよ　ほら　分かって
分かりあって

来来来！浮かぶ灯籠
連なってうねって龍に変わる
来不来？主役登場
暇なんてつまんで捨ててしまえ
来来来！宴は続く
ドサンピンキョンシーチョーリョーチュー！
もうone nightまた会えるかな
再見　つぎは君の言語で

来来来！好きよ嫌いよ
愛がうごめいた夜のとばり
来不来？酸いも甘いも
飲んで騒いだらおためごかし
来来来！朝は来ないで
一切合切大無礼講
要one lightもう会えないね
保重　黒目閉じるこの道で

「ラジオの海を泳ぐ」

後藤　千萌

■受賞のコメント■

幼少期から、絵を描くことや、文章を考えることに対して、人一倍関心がありました。保育園のお昼寝の時間に至っては、友達が寝静まる中、ひとり布団の中で物語をつくり、自分の手足や持ち込んだおもちゃを登場人物に見立て、コソコソと一人芝居をしているところを見られては、こっぴどく叱られたものでした。総じて私は創作活動が大好きなのです。

しかし、実は作詞というものはしたことがなく、今作が歴とした初めての作品となります。今回は、主要メディアが移りゆく中で、私にとっても大切なツールであるラジオの魅力を伝えたいと思い、ノイズが混ざりながらも周波数を合わせて番組を愉しむリスナーの様子を、海の底を泳ぐ人魚になぞらえました。

この機会を経て、選ばなかったテーマに関しても、それらを作詞という形で発散することにより、己の中にあった蟠りが昇華されるようで、もっとこの感情を上手く表現できないものかと試行錯誤するほど没入することができました。また、良い歌詞が降りてこないかと東京の街並みを逍遥してみたりもしました。自分をここまで突き動かしてくれるものはやはり言葉であり、創作活動なのだと改めて実感させられました。

末筆ながら、この度はこのような栄えある賞をいただいたこと、大変光栄に存じます。そして、文学賞に関わったすべての方々に厚く御礼を申し上げます。

『ラジオの海を泳ぐ』

ひみつの夜　ひそひそ話　してるみたいな
布団の中　ポケットラジオ持ち込んで
ノイズを掻き分ける　さあ集合時間
素晴らしい名場面も　煌びやかな衣装も
なにもいらない　これだけでいい
くだらないことで　笑えるこのひと時が好き

わたしは人魚　暗い暗い海の底を泳ぐ
水面に映る　陽を浴びるのもいいけれど
奥底に眠る　かがやきをあつめたい

ひとりの夜　めそめそ偶に　しちゃう時でも
布団の中　ポケットラジオ持ち込んで
合図は周波数　さあ涙拭いて
衝撃的な展開も　張り巡らせた伏線も
なにもいらない　これだからいい
お決まりの時間に　会えるこのひと時が好き

わたしは人魚　暗い暗い海の底を泳ぐ
声を引き換えに　地上に出るのもいいけれど
奥底に潜む　小旅行を楽しみたい

離れていてもアンテナ一つで会わせてくれる
何気ない会話　ただ　とりとめもなく
波のように流れていく
共犯意識が　心地良くて

わたしは人魚　暗い暗い海の底を泳ぐ
水面に映る　陽を浴びるのもいいけれど
奥底に眠る　かがやきをあつめたい

第 15 回（2023 年度）
明治大学文学賞　受賞作品集

2024 年 2 月 発行

編集・発行　明治大学文学部
〒101-8301　東京都千代田区神田駿河台１－１

ISSN 2434 - 9011